国立国語研究所学術情報リポジトリ

基礎篇第十課　もみじが　とても　きれいでした：です，でした，でしょう

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2020-03-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 国立国語研究所
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002789

日本語教育映画解説10

基礎篇
第十課

もみじが とても きれいでした

——です，でした，でしょう——

国立国語研究所

前　書　き

国立国語研究所では，昭和49年度以来，日本語教育部ついで日本語教育センターにおいて，日本語教育教材開発事業の一環として日本語教育映画基礎篇を作成してきた。これは従来，文化庁において進められていた映画教材作成の事業を新たな形で引き継いだものである。

日本語教育映画基礎篇は，各課5分の映画にそれぞれ完結した主題と内容を持たせ，それを教育の必要に応じて使用する補助教材，また，系列的に初級段階の学習事項を順次指導する教材として提供しようとするものである。

映画の作成にあたっては，原案の作成・検討から概要書の執筆まで，また，実際の制作指導においても，日本語教育映画等企画協議会委員の方々に御協力頂いた。ここに厚く御礼申し上げる。

この解説書は，映画教材の作成意図を明らかにし，これを使用して学習し，指導する上での留意点について述べたものである。この解説書がこの映画教材の利用を一層効果あるものにすることを願っている。この第十課「もみじが　とても　きれいでした」の解説は，日本語教育センター日本語教育教材開発室日向茂男の執筆によるものである。

昭和55年3月

国立国語研究所長

林　　大

目　　次

1.　は　じ　め　に……1
2.　この映画の目的・内容・構成……2
　2.1.　目的・内容……2
　2.2.　構成——場面を中心として……5
　2.3.　語句，語法，文型……30
3.　この映画の効果的な利用のために……38
　3.1.　学習基本文型の整理……38
　3.2.　語彙の総復習……48
　3.3.　練習問題……48
　3.4.　映画場面を使っての練習……54
　3.5.　進んだ段階での利用法……55
4.　主な参考文献……56
資料1.　使用語彙一覧……61
資料2.　シナリオ全文……81

1, はじめに

この日本語教育映画基礎篇は，初歩日本語学習期における視聴覚補助教材として企画・制作されたもので，この映画「もみじが　とても　きれいでした」は，その第十課にあたるものである。

この映画の企画，概要書（シナリオ執筆のための最終原案）の執筆等にあたったものは，次の通りである。

昭和52年度日本語教育映画等企画協議会委員（肩書きは当時のもの）

石田　敏子　国際基督教大学専任助手

川瀬　生郎　東京外国語大学附属日本語学校教授

木村　宗男　早稲田大学語学教育研究所教授

窪田　富男　東京外国語大学教授

斎藤　修一　慶応義塾大学国際センター助教授

国立国語研究所日本語教育センター関係者（肩書きは当時のもの）

野元　菊雄　日本語教育センター長

武田　　祈　日本語教育センター日本語教育教材開発室長

日向　茂男　日本語教育センター日本語教育教材開発室研究員

この映画「もみじが　とても　きれいでした」は，日向茂男研究員の原案に協議委員会で検討を加え，概要書にまとめあげてから制作したものである。制作は，日本シネセル株式会社が担当した。概要書のシナリオ化，つまり脚本の執筆には同社の前田直明氏があたり，また同氏はこの映画の演出も担当した。ただし演出の際の言語上の問題については，協議会委員及び日本語教育センター関係者の意見が加えられている。

本解説書の執筆には日本語教育センター日本語教育教材開発室研究員日向茂男があたったが，企画・制作段階での意図が十分生きるよう努めた。

現在，この映画は，より多くの人の利用の便をはかって下記の九か所において貸し出しを行っている。

- 北海道教育庁指導部社会教育課視聴覚教育係
- 宮城県教育庁社会教育課
- 都立日比谷図書館視聴覚係
- 愛知県教育センター企画管理係
- 京都府教育庁社会教育課
- 大阪府教育庁社会教育課
- 兵庫県教育庁社会教育・文化財課
- 広島県教育庁社会教育課
- 福岡県視聴覚ライブラリー

なお，この映画は，そのビデオ版とともに上記制作会社が販売している。

2. この映画の目的・内容・構成

2.1. 目的・内容

この映画「もみじが とても きれいでした」での中心学習項目は，サブタイトルが示す通り「です」「でした」「でしょう」の用法の理解である。初級日本語教育では一般に，文単位で名詞文，形容詞文，形容動詞文，動詞文を順次学習していくが，「です」による述部部分の言い方の学習が一応済むとその理解を土台にして「でした」や「でしょう」の用法の理解へと学習範囲を拡充していくことになる。

したがって，そうした時期にこの映画を補助教材として利用することが，最も効果的であると思われる。またこの日本語教育映画基礎篇を系列的に利用し，学習を進めていく場合にもほぼ同様の学習順を想定してこの映画は作成されている。もちろん教師の利用方法によっては，他のどんな時期にでも応用，利用できることは今までの各映画と同様である。

初歩日本語教育を「です・ます」体を基調として進めていこうとする場合，名詞，形容詞，形容動詞（の語幹）に接続する「です」とその変化形の理解，そして動詞に接続する「ます」とその変化形の理解は，日本語表現力を大きく飛躍させるひとつの段階である。この「です・ます」体の学習は一見単純そうにみえて，実はなかなか複雑なのである。特に形容詞文は，やっかいである。

「です・ます」体による言い方が一応身につくと，次には，「です」対「だ」，また「ます」対「動詞・終止形」の対比を通じて待遇表現上の差異に着目した学習も求められてくることになる。また文表現の述部部分を「のです」で結ぶ言い方も一度はどこかの時期に学習し，その用法を理解しておかなくてはならないものである。これらの学習を初歩日本語教育のどの段階でどの程度に取り上げるか，さまざまな意見・立場のあるところであるが，この映画では「です・ます」体を基調としてそこに「だ」や「のです」の用法の問題を多少加えるという立場をとった。

したがって「です・ます」体でひととおり初歩日本語教育を押し進める場合には，その辺の細かな理解は無視してよいであろうし，また待遇表現上の問題も含めつつ初歩日本語教育を展開する場合には，この映画からその発展的学習のヒントをいろいろ引き出すようにしていってもよいだろう。学習者の置かれた教育（学習）条件の中でできる限りこの映画を効果的に利用してほしいわけである。

次に語彙の面からこの映画を眺めると名詞，形容詞，形容動詞それぞれ，

この基礎篇に既出した語の復習をしながら，更に語彙を拡充するという方法をとっている。特に形容詞の学習に重点を置いている。つまり事物の属性を客観的に言う属性形容詞の復習をしつつ，感情や感覚の主観的表現である感覚・感情形容詞の理解をもめざしている。

今まで述べてきたことを整理すると，この映画の学習項目は次のようになる。

(1) 名詞，形容詞，形容動詞それぞれの語彙を拡充しつつ，それに「です」「でした」「でしょう」を組み合わせ日本語表現力を豊かにする。

(2) 「です」「でした」に対する「だ」「だった」を待遇表現上の観点から理解する基礎を作る。

(3) 「です」「ですか」に対する「のです」「のですか」の用法を理解する。

すでに述べた通り(2)(3)の取り上げ方の強弱は，教室で実際に教えている初歩日本語の程度に応じて，ということになろう。なおこの映画では「だ」「だった」は取り上げたが，「でしょう」に対する「だろう」は取り上げていない。「のです」は，映画中では「んです」という形で現れている。そして形容詞とその変化形に接続する場合にのみ触れた。

以上の他にほぼ同時期に取り上げられる二，三の学習項目がこの映画にはある。次の通りである。

(4) 「目的語＋に＋行く/来る」の用法の理解。

(5) 「ごろ」「ぐらい」の用法の理解。

(6) 「月」の言い方，「日」の言い方の理解。

(7) 時を表す名詞の用法の理解。

(3)は，「迎えに行く/来る」等の言い方である。(4)は，「8時ごろ」とか「8時間ぐらい」とか言う場合の「ごろ」「ぐらい」の用法である。

(5)は，一月から十二月までの言い方，また一日（ついたち）から三十一日

までの言い方である。

(6)は，「朝」「夜」，「今」「昔」等，時を表す名詞の用法の理解である。

以上，この映画での学習項目やその内容について簡単に述べてきたが，学習の中心となる「です」「でした」「でしょう」の映像化にあたっては企画の段階で次のような考慮をした。

(1) 「でした」の理解のために日記による回想形式を採用する。「＿＿です」については，今までの各映画でも事物の実体や属性を明瞭に提示することで映像的に描き込んできたが，「でした」，それから「ました」の理解のためには別の配慮が必要である。そこでこの映画では，日記による回想形式を利用した。

(2) 「でしょう」については，映像的に描きにくいものであるが，この映画では「でしょう」と言われた事柄がやがて映像の流れの中に実現化されるという方法をとった。

他に語彙理解を深めるために次の方針を立てた。

(3) 「きれいな」もみじを描くことを一方の主題にすえ，同時に「楽しかった」「一日」の全体を描こうとした。つまり「きれい（だ）」，「楽しい」，「一日」という語の意味の理解がこの映画の主題ともなっている。

(4) その他，個々の名詞，形容詞，形容動詞，更に動詞についても語の意味，概念をできる限り映像として定着するよう努めた。このことは，この日本語教育映画基礎篇の各映画についても言えることである。

2.2. 構成——場面を中心として

2.2.1. 映画での場面や言語表現については，以下の通り扱うことにする。

1. 映画の構成に従って場面を分ける時には，Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ……のようにし，それを更に小場面に分ける時には，Ⅰ—1，Ⅰ—2，Ⅰ—3……のようにする。

2. 言語表現については，文単位で①②……のように通し番号をつける。文を変形引用する時には，’の印をつけ，①’②’……のようにする。変形引用がふたつ以上ある時には，’’’’……の順で’を重ねていく。

3. なおこの映画中に直接現れていない文や語句を例示する時には，〔1〕〔2〕……のように〔 〕付きの番号をつけ，その変形引用には，上記2.の場合同様’印をつける。文や語句を束にして例示する時も出現順に通し番号にする。

以下の言語表現の扱いについては，文単位の認定に多少問題のあるところもあるが，ここでは積極的にはその問題に触れない。なお①②……の文番号は，使用語彙一覧で引用される文やシナリオ全文でのものと共通である。

2.2.2. この映画は，まず映画全体の内容を提示する，ある少年の日記のナレーションから始まる。そして再び少年の日記のナレーションで全体の内容がしめくくられ終わる。つまりこの映画では日記という形式による回想形式が採用されているわけだが，それはすでに触れた通り主要学習項目のひとつ「でした」の用法の理解を徹底化するための手段であった。

そしてこの日記によって回想され，映画として展開するのはその少年と家族が修善寺（しゅぜんじ）へ「きれいな」もみじを見物に行った「楽しかった」今日「一日」の出来事である。そこに大きく以下の三場面を拾うことができる。

○ 迎えに来てくれた吉田さんの車で少年，父，母の一家が修善寺へ向かい，

○ 修善寺に着いてからは，

◎ もみじ林でもみじ見物をし，

◎ その後，公園で小休憩し，

◎ おみやげ屋であれこれおみやげ品を見，

◎ 別のおみやげ屋でおみやげ品を買い，

◎　店を出てから，帰途に着くべく駐車場へ向かう。

◎　再び吉田さんの車で家に帰り，門前で吉田さんに礼を言い，別れる。

修善寺でのいろいろな場面を小場面として扱うことにすると，この映画は大きく三つの場面に分けられることになるわけだが，それに冒頭の日記のナレーションと結末の日記のナレーションを各一場面として加えて，以下の五場面がこの映画の構成の骨子となっている。

Ⅰ　日記(1)

Ⅱ　車の中で

Ⅲ　修善寺で

Ⅳ　家の前で

Ⅴ　日記(2)

次にこの映画での人物構成を見てみると，少年，父，母というある家族に家族外の人が一人加わるという構図でできている。したがって簡単な図式で言っても，父↔母，父・母↔少年，父・母↔家族外の人，少年↔家族外の人，のような待遇表現上の問題がからむ。その問題を全く取り上げなかったというわけではないことは，すでに触れた。

ところでこの家族外の人，映画では吉田と呼ばれる青年は，何者であろうか。映画にはその説明はないが，父が勤める会社の部下といったところであろう。吉田は，少年とその家族が修善寺へもみじ見物に行きたがっているのを知って，好意的に運転手役をかって出たというところであろうか。現在の日本の情勢から考えてみて，おかかえ運転手ではないであろう。

この人物関係の構図は，第四課「きりんは　どこにいますか」をひきついでいるものであり，また極めて似たものには第八課「どちらが　すきですか」がある。この基礎篇のシリーズで用いられている一種のパターンである。

ここでこの映画の主要な舞台となった修善寺（しゅぜんじ）について簡単

に触れておくと，修善寺は伊豆半島にある温泉地の一つで，東京から行けば新幹線で三島まで，その後伊豆箱根鉄道を利用することになる。他に東京から直通急行もある。車を利用する時には，東名高速道路で沼津 I．C．まで，その後国道136号で25キロである。

修善寺温泉は，今から約1,200年ほど前に弘法大師が発見したとかいう伝えがあり，また鎌倉時代には源氏興亡の舞台になる等，歴史的にも伊豆地方の自然とともに多くの人をひきつけている。文人墨客の足跡も多い。川端康成の「伊豆の踊子」の舞台になったことでも有名である。この小説の主人公は，旅一座の踊子と修善寺で出会い，天城を越え，下田へと旅を続け，そこで別れる。伊豆の旅である。また伊豆に温泉地の多いところから「湯の街エレジー」のような歌謡が生まれ，長く歌われている。

最後にこの映画の作品としての主題であるもみじ見物について簡略に述べたい。この基礎篇の今までの映画は，季節感を積極的に取り上げることがなかった。しかし映画の舞台に季節感が盛り込まれていることは，あらためて言うまでもなく大事なことである。ここでは日本の秋を取り上げ，もみじ見物を主題にすることとした。

まず，もみじとは秋に草木の葉が赤や黄に変わることであり，また楓，楓の葉のことも言う。秋，山野に出かけ，もみじをたずね観賞する。自然の風物の中に自分を置き，自然を楽しむわけである。これをもみじ狩りと言う。能に同名の曲があるが，そちらは鬼女退治の話である。日本のもみじ前線は，北海道が十月中旬，東北・中部が十月下旬，その他は，十一月中旬，下旬と南下する。カエデの紅葉，イチョウの黄葉は，霜の降り始める直前がみごろである。

他に，秋の味覚をたずねて梨もぎやぶどう狩りをすることも多い。新しいところでは，いも堀りがある。秋祭りもいろいろあるが，これも日本の秋の楽しい風物詩である。中でも豪華な山車（だし）が幾つも練り歩く川越祭り

は名高い。この基礎篇でもどこかで一度とりあげたいと思っている。

さて上記五場面について順に言語場面，言語表現上の問題点を検討しながら見ていくことにする。

1. 日記(1)

すでに述べた通りこの映画は，少年の日記の形式をとっている。冒頭，この映画の全体内容を提示するナレーションがあり，それから朝起きて，出かけるまでのことがナレーションとして続く。

① 十一月二十三日,今日は,みんなで修善寺へもみじを見に行きました。

② 朝，早く起きました。

③ 外は，まだ明るくありませんでした。

④ 六時ごろ，吉田さんが車で迎えに来ました。

日記では，①のようにまず月日を書き（その後に天候を書く），そしてその日の出来事を要約して書くのが一般的であろう。十一月二十三日は，勤労感謝の日であり，国民の祝日である。つまり，学校も会社も休みであり，秋の行楽を楽しむのにふさわしい一日である。箱根や修善寺のもみじも見ごろである。

さてこの映画では「月」「日」の言い方は，「十一月」と「二十三日」しかないが，数詞を学習した後ではその全部が言えるようにどこかで繰り返し練習しておく必要のあるものである。ついでに「季節（春・夏・秋・冬)」の言い方も学習しておきたいものである。

また①の「今日」をきっかけとして「きのう」「あした」等，「今月」「来月」「先月」等への学習へ広げていくこともできる。この場合「です」「でした」の用法も加えた学習をすることになる。

〔1〕 きのうは，十一月二十三日でした。

〔2〕 先月は，十月でした。

①の「今日」は，時を表す名詞である。「今日」が特定化され，強調され，主題となっているため「今日は」と「は」を伴っている。その意識がなければ，「今日」を単に副詞的に，あるいは副詞に転化して用いればよい。

①′ 今日，修善寺へ行きました。

①の「みんな」の用法については，この映画解説第六課「しずかな　こうえんで」（P11～12）を参照してほしい。この「みんな」は「みんなで行く」である。「みんな」と「行く」の関係は，「みんな」（行為者）―「行く」（行為）の関係にある。「みんなが行く」と比較して，つまり「が」と「で」ではどう違うか比較してみると，「みんなが」は単に主格を表しているのに対し「みんなで」はある一定の基準を設定し，表現しているところに違いが見られる。このことは，次のことからもわかる。

〔3〕

一　人
二　人
⋮
みんな

で行く。

この「が」「で」は，それが対象語に伴って用いられる場合にも同様である。

〔4〕

これ

が
で

いいです。

「で」は，「これ」が自分にとってどのようなものであるのかのある種の基準を設定していると言えよう。言葉を補えば，

〔5〕 詳しく調べるわけではありませんから，この辞書で十分です。

というふうになろうか。

次に「見に行く」の「に」については，「目的語＋に＋行く/来る」の文型と

してしっかり学習させたいものである。この場合目的語は動詞の連用形を用いるが，「買物に行く」「見物に行く」等，名詞が用いられることもある。④に「迎えに来る」がある。「行く」「来る」の理解を前提とした発展的学習がここで望まれている。

②の「朝」は，時を表す名詞。①の「今日」と同様に特定化し，強調し，主題にすれば，「朝は」となる。

②′　朝は，早く起きました。

ここではその意識はない。単に朝早く起きたことを言っているだけである。

②の「早く」は「起きる」を修飾する形容詞の副詞的用法。少なくともこの映画に出てくる形容詞の副詞的用法には習熟させたい。その場合，意味的に結合する動詞の学習がその前提として，まず求められることになる。

③の「外」は，家の外である。修善寺行きのため朝早く起きた少年の意識は，まず家の外へ向かったわけである。「外」は，「今日」，「朝」等，時を表す名詞と違って「は」を省略して言うことはできない。③「明るくありませんでした」は，「明るい」の過去否定形。形容詞を導入した第三課「やすくないです　たかいです」では，「____ないです」形をとりあげ，「____くありません」形に触れていないから，まずその理解を前提としなければならない。「____ないです」形をここで採用すれば，「ないでした」と「____なかったです」の二形が考えられる。つまり「明るい」の過去否定形には，理論的には「明るくないでした」「明るくなかったです」「明るくありませんでした」の三形があることになる。「明るい」の反対語「暗い」で言ってみると，

③′　外は，まだ暗いでした。

②″　外は，まだ暗かったです。

③‴　外は，まだ暗くありました。

の三形になる。一方で日本人の言語感覚にはどの形が最も自然であるのかと

いう問題があり，形容詞文での言い切りにはまだまだすっきりしない問題が多い。

④「六時ごろ」の「ごろ」は，大体の時刻をいう言い方。後出する「ぐらい」は，大体の（所要）時間をいう言い方。時間の言い方には，時刻の言い方と（所要）時間の二つの言い方があることはこの解説書第五課「なにをしましたか」で触れたところだが，それを「ほぼ」の感覚で言うと「(ほぼ) 八時ごろ」とか「(ほぼ) 八時間ぐらい」となる。なお，「ごろ」「ぐらい」は，「ころ」「くらい」であってもよい。

「ごろ」は，もちろん時刻にのみ関して用いられるわけではなく，ある時をその前後も含め幅広く指して言うのに用いられる。

〔6〕 そろそろ吉田さんが車で迎えに来るころです。

（この例のように文相当の連体修飾を持つ場合や名詞として使われる場合には，「ごろ」ではなくて，「ころ」である。）

④の「吉田さん」は，今日修善寺まで車で案内してくれる家族外の人。「吉田さんが」となるのは，既知・未知で言えば未知だからである。④の文は，出来事そのままの叙述である。

④の「迎えに来る」は，人に関してのみ言う。事物であれば「取りに来る」である。

以上，今日一日のことを日記に要約して書いた①に始まって，②からはその日の出来事に即して進行することになる。①のみならず②〜④が日記体のナレーションであるのは，回想形式を明瞭化するためであった。

II　車の中で

父，母，そして少年の一家は，修善寺へおもむくべく吉田さんの車へと乗り込んだ。多分この一家は，東京郊外に住んでいると思われる。東名高速道路に入るまでが一時間ほど，東名の沼津 I．C．まで一時間余，そこから修善

寺のもみじ林まで一時間ほど，その他の時間も含め三時間半から四時間くらいかかるところであろう。出発を六時三十分として十時半ごろには向こうに着くことになる。

この場面Ⅱ以下，場面Ⅳまでは当日の実際の行動そのままに描かれる。映画としてその日の行動の進行に入りこんだわけである。したがって言語表現も対話，あるいは会話の形で進行する。

さて，修善寺へ向かう車中いろいろ話がはずんだことであろうが，ここでは以下，三つの話題が映画に取り上げられている。順に検討していく。

Ⅱ—1　天気を話題にして

こうした行楽には何より天気がものを言う。早速，天気が話題になった。ここでのいい天気とは，行楽日和りの秋晴れのことである。

吉田　「⑤今日は，いいお天気ですね。」

母　　「⑥本当に，いいお天気ですね。

　　⑦修善寺も，たぶん，いいお天気でしようね。」

吉田　「そうでしょうね。」

⑤⑥⑦の「お天気」は，会話では「天気」より一般的であろう。特に女性ではそうである。書き言葉である日記では，「天気もよくて（㊷）」となる。なお「お」の学習については，この映画では他に「店」「お店」の使い分けがある。こちらは会話内での使い分けである。

⑤で運転中の吉田が会話を開始すると，それに母が答えた。⑥は先行する⑤の表現をそっくり繰り返して応答したものであるが，「本当に」で「いいお天気」を強調している。母は，更に話題になったいい天気をこれからおもむく修善寺にまで広げる。修善寺の天気については，今自分の目で確かめるわけにはいかないから不確かな断定，あるいは推量的な言い方として「たぶん，＿＿でしょう（ね）」の表現が用いられた。「たぶん」は，十のうち，

七，八まではと可能性を推量していう副詞である。

⑧は，先行する⑦の表現にそのまま応じた応答文である。ただ⑦の名詞句を「そう」に代行させている。これは，第一課以来学習してきたことである。⑦⑧とも文末が「でしょうね」である。⑦の「でしょうね」は相手に語りかけ，同意を求める気持を，⑧の「でしょうね」は相手の言葉に同調する気持を表している。これは終助詞「ね」の働きから来るものである。

Ⅱ－2　修善寺を話題にして

修善寺の天気が話題になったところから，今日行く修善寺に関心を抱く少年が話に加わってくる。少年の興味は，まず修善寺までの遠さ，また車による所要時間である。

少年　「⑨吉田さん，修善寺は遠いんですか。」

吉田　「⑩いいえ，そんなに遠くありませんよ。」

少年　「⑪吉田さん，修善寺には，何時ごろ着きますか。」

吉田　「⑫そうですね，向こうには，十時半ごろ着きますよ。」

父　　「⑬うん，そうすると，車で四時間ぐらいですね。」

母　　「⑭修善寺のもみじは，きれいでしようね。」

⑧の母の言葉に現れた「修善寺」を耳にして少年は，それを自分の関心と立場から積極的に話題にした。吉田に修善寺までの遠さについて納得した説明を求めようとしたのが，⑨である。久野　暲（『日本文法研究』，1972，大修館）によれば「ん（の）ですか」は，自分が見たり聞いたりしたことについて相手に納得いく説明を求めようとする表現である。

ところで「のですか」できかれたら，「のです」で答えるという関係が特にあるわけではない。⑩では，「遠くありません」と答えている。この「遠くありません」については，③「明るくありませんでした」の説明参照のこと。⑩「そんなに」は，この「遠くない」の程度を取り立てて言ったもの。

「そんなに＿＿ない（ん）」の表現文型は，特別取り立てていうほどの程度・数量でないことを表す。

〔7〕 人出は，そんなに多くありません。

「そんなに」は，第一課以来続いてきた「こそあど」学習の一応最後のものである。連体的用法の「そんな」等は，第八課で取り上げた。

⑪「何時ごろ」の「ごろ」については，④のところで述べた。⑫の「そうですね」は，相手の言葉を受けて考えたり答えを準備したりする時の表現で，応答語の一種と言える。談話を形成するための表現としてその用法を学習する必要がある。なお，同種の表現の理解のためには第八課を参照のこと。⑫の「向こう」は修善寺のことである。

⑨⑩，⑪⑫と少年と吉田の言葉のやりとりが続いた。そこへ父が加わってくる。⑬「うん」は，少年と吉田の言葉のやりとりを受けて自分自身に納得的に言ったもので，軽い感動詞。「ほう」等と言うこともある。この「うん」は，「はい」にも「ええ」にも代えられない。「うん」の基本的用法については，第八課参照のこと。

⑬の「そうすると」は，先行する表現を受けて次に結論を導き出そうとする時の言い方。⑬「四時間ぐらい」の「ぐらい」は，④のところで述べた通り大体の（所要）時間を言う際に用いられる。もちろん「ぐらい」は，もっと一般的に言えば数量や基準を示す語について大体の見当を表す。なお前に述べた通り「ぐらい」は「くらい」でもよいが，名詞である場合には「くらい」である。

⑬「四時ぐらいです」の「です」は，（所要）時間をいう動詞「かかる」を代行している。これは早くから学習項目に組み込まれていて第一課，第二課には次のような表現がある。

〔8〕 食堂はあそこ ｛です。（1—㊶）／にあります。

〔9〕 タクシー乗り場はどこ ｛ですか。（2—⑦）
にありますか。

〔8〕〔9〕に見るようにその動詞のとる格助詞をも含めて「です」になる。動詞「かかる」は「時間がかかる」であり，時間量をいう「一時間」「二時間」等には格助詞が伴わないから，次のように理解できる。

⑬' 車で四時間ぐらい ｛（時間が）かかりますね。
ですね。

この「です」の問題については，映画解説書6「しずかな　こうえんで」（P27～28）に詳しいのでそちらを参照されたい。ここでは，この「です」の用法の理解を「でした」へ，場合によっては「でしょう」にまで発展させることをねらいとしている。

父の会話への参加に引き続いて母も話に加わった。それが⑭である。会話の主題は，修善寺行きそれ自体から修善寺のもみじに移る。修善寺のもみじは，まだ実際には見ていない。そこで「もみじがきれいである」ことを話し手が推量していったのが，⑭の「きれいでしょうね。」である。映画的には続くカットでもみじが提示されている。語法的にはこの「でしょう」は，形容動詞（の語幹）に接続している。

なお⑭の母の言葉に対して父が言葉で応じるなら「うん」となるのが自然なところであろう。ここでは，父はうなづくことですませている。こうした言葉に代わるうなづきについても，積極的な学習を考える必要があろう。

Ⅱ—3　修善寺に到着

車中であれこれ話をしているうち車は修善寺のもみじ林の入口に到着した。

吉田　「⑮さあ，着きました。」

少年　「⑯ああ，ちょうど四時間でしたね。」

⑮「さあ」は，「さあ，帰りましょう。」（後出㊶）等の場合には人を誘ったり人の行動を促したりするための呼びかけ語だが，ここでの「さあ」は，「我々のめざした目的地に着きました」という事実を強調する気持で言っている感動語である。次の例もそうである。

〔10〕 さあ，できました。

⑯の「ちょうど」は，ある基準に過不足なくぴったり一致することを言う副詞である。時刻及び（所要）時間についても用いられるばかりでなく，物の分量一般について用いられる。ここでは，「ごろ」「ぐらい」と対比させて学習させたい。

〔11〕 ちょうど十時半です。

〔11〕' 十時半ごろです。

〔12〕 ちょうど四時間です。

〔12〕' 四時間ぐらいです。

⑯の「四時間でした」の「でした」は，先に触れた通り⑬の「四時間ぐらいです」の「です」からの発展的学習であり，「でした＝かかりました」である。この言わば代動詞としての「です」「でした」の用法は，「でしょう」ではどうであろうか。これには「ましょう」の推量的用法が関係してくる。つまり，

⑯' ちょうど四時間かかりましょう。

に対して，

⑯'' ちょうど四時間でしょう。

が対応するわけだが，現今では⑯'よりも次の⑯'''の方が一般的な表現になっていると言えよう。

⑯''' ちょうど四時間かかるでしょう。

ここで「でしょう」は，「です」「でした」と違って動詞にも接続することがわかる。これは，後の学習課題である。

Ⅲ　修善寺で

修善寺に到着した一行の行動が展開する。もみじ林を散策する他，修善寺（寺そのもの）を訪れたり，またどこかのレストランで食事をしたりさまざまなことがあったであろうが，この映画では以下の五つの場面を取り上げている。順に検討を進めていく。

Ⅲ―1　もみじ林で

一行は，もみじ林を散策する。このもみじ林は，修善寺自然公園の中にある。修善寺自然公園は，温泉街から見て北側の山間部にあり，もみじ林の他に梅林，花しょうぶ園等がある。もみじ林は，自然公園の中央部と西端部にあり，それぞれ約1,000本の群生地となっている。それが紅葉するさまは，見事である。一行の訪れたもみじ林は，この自然公園の中央部にあるものである。

母　「⑰きれいですね。」

父　「⑱うん，すばらしいね。

　　⑲（吉田に向かって）きれいなもみじですね。」

吉田「⑳ええ，今が一番きれいですね。」

母　「㉑いい色ですね。」

⑰～㉑は，実際にもみじを目の前にしての感動をさまざまに表現しているものである。特に言葉の上で難しいところもなく，ここは見る映画としても見てそれがわかる映像教材としてもこの作品の中心部をなすものである。教材的観点から二，三つけ加えるなら，まず⑦「いいお天気でしょう」，⑭「きれいでしょう」と推量的に言われていたことがここに到って実現化されていること，つまり「でしょう」が「です」になっているのに気付かせることである。語の意味の点では「きれい」「すばらしい」の違いを理解させることである。「きれい」（形容動詞）については，形容動詞を扱ったこの映画解説

書6を参照してほしい。「すばらしい」（形容詞）は，思わず感嘆するほど良いという意味を表し，「きれい」を修飾して次のようにも言える。

〔13〕 もみじがすばらしくきれいですね。

待遇表現上の問題に目を向けるなら。⑰（母）に対して⑱（父）は「うん」と応じ，「すばらしい」に「です」を伴わず言っていることや，続いて吉田に語りかけた⑲（父）には，⑱になかった「です」が伴い，それに応じる⑳（吉田）は「うん」ではなく，「ええ」で受けていること等に注意を向けたい。

⑳「一番」は，それが最上のものであることをいう副詞。第八課参照のこと。⑳「今がきれいです」は，主題は当然「もみじ」である。

⑳' もみじは，今がきれいです。

これと同様の表現には，たとえば，

〔14〕 この湖は，夕方がきれいです。

等がある。

さて，思い思いにもみじを観賞して，もみじ林を抜けた一行は，どこへ行ったことであろうか。この映画では，続いて公園で小休憩へと話がとんでいるが，それまでにはかなりの時間の経過がありそうである。

このもみじ林近くには，夏目漱石の詩石碑がある。そこには明治43年，胃病のため修善寺温泉で療養した時の漱石の「修善寺日記」の一節が刻み込まれている。

仰臥人如唖
黙然看大空
大空雲不動
終日杳相同

一行も，おそらくこの漱石石碑に足をのばしたことであろう。

Ⅲ—2　公園で

一行がいるところは，とっこの湯公園である。この公園のベンチに四人は腰かけ，修善寺の古地図を見ながら話をしている。行楽地での午後のひとときである。映画では彼らの背の向こうに低く流れる川が見える。桂川である。画面左手になるが，この桂川の向こう岸から川に突き出て小屋のようなものがある。それがとっこの湯である。とっこの湯は，話の途中，ワン・カット大写しされている。

とっこの湯には，この地を訪れた弘法大師が桂川で病父を洗う少年を見て心を打たれ，手にした「とっこ」（仏具）で川の岩を砕き，霊湯を湧出させ，病気をなおしてやったという伝えがある。現在でも清流の岩から湯があふれ出ている。

少年「㉒これは，昔の修善寺の地図ですね。」

父　「㉓うん。

　　㉔えーと，ここは，このあたりだね。」

少年「㉕このあたりは，昔は，家が少なかったんですね。

　　㉖とてもさびしかったんでしょうね。」

吉田「㉗そうね。

　　㉘今は，にぎやかだね。」

少年「㉙道も，とても狭かったんですね。」

吉田「㉚今は，ずいぶん広くなりましたね。

　　㉛交通も，不便だったでしょうね。」

㉒は，皆が今見ている修善寺の古地図について言ったもの。㉒の少年の言葉に父は，㉓の「うん」で応じた。続く㉔は，父が少年に古地図で見て自分たちのいるところを教えた表現である。そこで待遇表現上文末も「です」ではなく，「だ」になっている。㉔の「えーと」は，考え込んだり，次の言葉をさがしている時に発する感動詞。㉔の「ここ」は，今皆がいるところ，小

休憩しているところ，つまりとっこの湯公園である。それを古地図の中でさがしてみると，「このあたり（㉔）」というわけである。

地図が昔の修善寺のものであることから，話は修善寺の昔と今の話へと発展していく。㉕の「このあたりは」は，㉕から㉛まで続く会話の主題となっている。その元で「昔は」「今は」がコントラストで語られる。「このあたりは，昔は，……」で始まる㉕の表現は，古地図を見て（観察して）の少年の言葉である。古地図で見る限り家の数は，そう多くはない。それを根拠として観光地として賑う現在の修善寺と比べ「ん（の）です」という強調の言い方が選ばれた。㉕の「少なかったんです」は，⑨の「遠いんです」の学習の発展上にある。

㉕の「昔は」は，㉖の文をも支配している。そして㉖の「さびしかった」は，㉘の「にぎやかだ」と対している。「さびしい」は，たとえば一人日本で勉強する留学生の孤独な気分を主観的に表現して「さびしい」という場合と，人家もまばらで人通りも少なくひっそりとした様子を客観的に見て「さびしい村」という場合とがある。ここでは，後者である。

㉖は，㉕との連関で言えば家が少なく，したがってさびしい村であったろう，ということになる。つまり㉕の表現を根拠にして説得的に強調して，更に推量的に言ったのが，㉖の「ん（の）でしょう」ということになる。

㉕㉖の少年の言葉に㉗で吉田が応じた。㉗「そうね」は，相手の言葉に同調する時の言い方で待遇表現上の差を伴って他に「そうだね（㊹）」「そうですね（㊷）」がある。

㉘は，㉕㉖の「昔は」に対する「今は」である。ただ「にぎやか」「さびしい」は反対語の関係にあるわけではない。第六課「しずかな　こうえんで」では，「にぎやか」は「静か」と対していた。㉘は，吉田の少年に対する言葉であるため「にぎやかです」よりも「にぎやかだ」が選ばれた。

少年は古地図を見て（観察して）の意見をなおも続けて言う。それが㉙で

ある。したがって㉙は，「昔は」である。家も少なく，さびしい村で，道も狭かった，というのが少年の意見である。ここでも「ん（の）です」が使用されている。

㉚の「今は」は，㉙とコントラストになる。したがって「広い」は「道が広い」である。㉚の「なる」については，第十五課「うつくしい　さらになりました」を参照のこと。

㉛は，「昔は」である。㉙をよりどころに推量的に「でしょう」と表現している。道も狭く，交通も不便であったろう，ということである。

Ⅲ—1　おみやげ屋で

画面で見ると一行は，右手のおみやげ屋を出て左隣のおみやげ屋へ入ろうとしている。このおみやげ屋は，桂川をはさんでとっこの湯公園の向こう側にある。公園を出て虎渓橋を渡ると目の前に修善寺（寺そのもの）があり，その左手におみやげ屋が並ぶ。公園で小休憩した後（修善寺にも立ち寄ったことと思うが），一行はおみやげ屋めぐりを始めた。こうした観光地でのおみやげ屋のぞきは，いつでも楽しいものである。一行は，次の店へ入った。

ここで話題となるのは，まず竹細工の人形，そして次に馬の置物である。

母　「㉜これは，珍しいですね。

　　㉝高いんでしょうね。」

店員「㉞いいえ，奥さん，これは，安くていい品ですよ。」

少年「㉟あっ，馬だ。

　　㊱僕，あの馬がほしいな。」

父　「㊲あれは，高いよ。」

店員「㊳いいえ，高くないですよ。

　　㊴ほかの店では，もっと高いですよ。

　　㊵これ，どうです？」

母　「㊶あちらのお店の方が安かったですね。」

吉田「㊷そうですね。」

㉜の「これ」は，棚に並ぶ竹細工の人形。㉜の「珍しい」は，都心のデパート等ではお目にかかれない，こうした観光地特有のおみやげ品を見て言ったものである。

㉝の「高い」は，「値段が高い」である。そして㉝の「高いんでしょうね」は，「珍しいおみやげ品」であること等を根拠にしてそれを強調し，相手に説明を求めようとする気持で言っている。「高いんですか」に比べると，語調が柔らかい。

㉝の母に㉞で店員が応対する。㉞の「奥さん」は，呼びかけ語。相手が男性なら「御主人」とか「旦那さん」とか言うところであろうか。㉞「安くていい」は「品」にかかる連体修飾語。「安く，いい」とも言えるが，前者の方が口語的である。二つの形容詞が並んで体言を修飾する言い方をここでは学習させたい。㉞「安くて」は，もちろん「値段が安い」である。㉝を質問文，㉞をそれに対する応答文とすると「いい品」の「いい」は余計であるが，おみやげ品を売ろうとする店員の積極的な姿勢が出ているということになろう。㉞「品」は，品物，商品のことで，ここではもちろんおみやげ品の竹細工の人形である。

㉟からは会話の主題は，馬の置物に移る。㉟は，ある場面内で自分の興味をひくもの，あるいは自分の予想外のもの等を発見した時の表現で，ここでは店内に馬の置物を見つけた少年の言葉。この表現文型には「____は」の部分がない。また誰かに語りかけるわけではないから「____です」ではなく「____だ」を用いる。㊱は，「僕は，あの馬がほしいな」である。「僕」の用法，「は」の省略，「がほしい」の用法，「な」の機能については，この解説書8「どちらが　すきですか」を参照してほしい。㊲は，㊱の少年の言葉に父が反応したもの。あの馬は，値段が高い，ということである。つまりおみ

やげ品としての一般的な基準に照らして，あるいは少年の買える範囲を越えて値段が高いということである。語法的には「高い」に「です」が伴わないことに注意。

父と少年のやりとりに，㊳で店員が口をはさんだ。㊳「高くないです」は，③や⑩での言い方にならえば「高くありません」となる。㊴は，㊳の補足説明。比較の言い方である。この解説書8を参照してほしい。㊵は，店員が客に品物をすすめる時の言い方で，ていねいに言えば「これ（は），いかがですか」となろう。

父，店員のやりとりを見て，母と吉田が言葉を交わす。㊶の「あちこちのお店」は，方角的にもあちらである先ほどまでいた店のこと。「お店」と「お」をつけるのは，女性に一般的であろう。男性は，文脈，場面により「店」「お店」と使い分けしそうである。この種のものには「お花」等がある。『これからの敬語』（1952，文部省）には，「女性のことばとしては『お』がつくが男子のことばとしては省いているもの」として「〔お〕米　〔お〕菓子　〔お〕茶わん　〔お〕ひる」の例があげられている。

㊶の「安かった」は，もちろん「馬（の値段）が，安かった」である。「安かったです」と同じ言い方は，㊹に「楽しかったです」がある。㊷は，㊶に同意する応答文である。

Ⅲ—4　別のおみやげ屋で

四人は，そのおみやげ屋を出て先ほどのおみやげ屋に戻る。そこで馬の置物を買う。

母　「㊸ね，安いでしょう。」

父　「㊹そうだね。

　　㊺さっきの店は，安くなかったですね。」

店員「㊻いらっしゃいませ。」

母　「㊼これをください。」

店員「㊽はい，かしこまりました。

㊾お待たせしました。

㊿ありがとうございました。」

㊸「ね」は，相手の注意を喚起し，念を押す気持で言う呼びかけ語。「ねえ」となることが多い。文型的には「ね（え），＿＿でしょう」である。この「でしょう」は，相手に問いかけ同調を求めようとする時に用いるもので，不確かに断定したり，推量的に言う「でしょう」とは学習上別に扱っておきたい。述部に動詞を用いれば，次のような文例が考えられる。

〔15〕　ね（え），（あなたも私と）一緒に行くでしょう。

㊸の母の言葉に父は，㊹で同意応答した。㊺の「さっき」は「さきほど」であり，時間的に少し前のことを指す。ただ「さきほど」の方が「さっき」よりていねいである。「さっきの店(㊺)」と「あちらのお店(㊶)」を比べると前者が時間的言及であり，後者が方向的言及であることになる。また「店」「お店」がこの両者で使い分けされていることに注意。前者は父が，後者は母が言っている。㊺の「安くなかったです」は，語法としては「安かったです」の否定形。こう並べてみると「です」部分が不変であることに気付く。

㊻は来店した客に店員の言う慣用的表現で，客はふつうこの言葉に直接応じない。次の㊼㊽は，対になった表現である。㊼は，店で買物をする時に言う。㊽は，その客に応待して店員が言う。この㊽で「はい」は，「ええ」に変わりえないことに注意すること。

㊾は，店員が買物客に品物を渡す際に言う慣用的表現。㊿は，買物をした客，あるいは店を出ていく客に店員の言う御礼の言葉。店員は，ふつう㊿を言う時に頭を下げる。なお，㊾㊿の店員の言葉にも客の方が直接言葉で応じることは一般にないようである。

Ⅲ－5　おみやげ屋を出ながら

一行は買物を済ませ，おみやげ屋から出てくる。楽しかった秋の日の行楽も終わろうとしている。観光地見物とは，一般的にこんなものであろう。

店を出ながら，父は腕時計を見て，次のせりふを言う。

父　「㊶さあ，そろそろ帰りましょう。」

㊶の「さあ」は，相手を誘ったり，相手の行動を促したりする時の呼びかけ語。「さあ，＿＿ましょう。」の表現文型で，人に誘いかけたり，催足したりする際に用いる。この際「さあ，そろそろ＿＿ましょう。」と「そろそろ」を添えて用いられることも多い。「さあ」については，⑮の「さあ」とこの「さあ」の用法の違いに注意すること。

㊶の「そろそろ」は，ある状態に向けて徐々に進行する様子を言う副詞。ここでは，「帰る」という行為に向けて少しずつ体勢を整えること。「さあ，＿＿ましょう。」という表現文型中に「そろそろ」が用いられると，そうした意味の他に断定を避け，柔らかに言おうとする姿勢，また遠慮していう気持が加わる。

「そろそろ」は，また何か一定の基準に対して余り時間のない様子も言う。

〔16〕　そろそろ帰る時間です。

ついでながら「いよいよ」は，物事が段階的に進み，その最終段階に来ている様子を言う副詞である。

〔17〕　いよいよ帰る時間です。

㊶の「しましょう」は，勧誘の言い方。第九課，また第十三課を参照のこと。「そろそろ帰りましょう」の父の言葉で一行は駐車場の方へと向かった。後は帰途に着くのみである。

Ⅳ　家の前で

一家は，再び吉田の車に乗り込み，家に帰ってきた。車を降り，門前で挨拶が交わされる。車を運転してもらい一日お世話になったことへの御礼，また別れの挨拶が主題となっている。同種の場面は，第四課「きりんは　どこに　いますか」の最終場面にも見られる。是非比べられたい。

父　「㊷遅くまでありがとうございました。」

母　「㊸ありがとうございました。

　　㊹（夫に）今日は，とても楽しかったですね。」

吉田「㊺楽しかったですね。

　　㊻じゃあ，失礼します。

　　㊼さようなら。」

父・少年「㊽さようなら。」

母　「㊾さようなら。」

少年「㊿さようなら。」

㊷㊸は，今日一日の吉田さんの行為に対しての御礼の言葉である。㊷は，遅い時間まで人にいろいろ世話になったり，迷惑をかけたりした時にそのことを感謝して言う言葉。

㊷の「遅く」は，形容詞から転成した名詞で，同種のものに「遅く」の反対語「早く」や「近く」「遠く」がある。

〔18〕　朝早くから夜遅くまで働く。

〔19〕　近くの他人，遠くの親戚。

この㊷，㊸の御礼の言葉には，「いいえ」とか「いいえ，どういたしまして」といった応答が一般的である。母は㊸で吉田に御礼を言った後，㊹で今度は夫に今日一日の修善寺行き＝もみじ見物をふり返り，それに満足した自分の気持を表現した。これは，㊹を吉田に聞かせることによって感謝の気持を更に述べたことになる。

㊹の母の言葉に父が直接応じれば，「うん」，とか「うん，楽しかった。」となるところであろう。

「楽しい」は，『類義語辞典』（徳川宗賢・宮島達夫，1972，東京堂）によると「うれしい」との対比で次のように説明されている。

- うれしい……自分の期待していた（略）ような状況の変化を知って感じるこころよさ
- たのしい……自分の行動を通じての快感。

すでに述べた通り母は今日一日のドライブともみじ見物をふりかえり，「楽しかった」と言ったのである。吉田も母の言葉に応じて㊺を口にした。

㊻の「じゃあ」は会話を展開させ，結論を導き出そうとする時の言い方。ここでは別れの挨拶を切り出そうとしている。㊻の「失礼します」については，たとえば先生宅を訪問した時を例にして.

〔20〕

失礼	します していません しました	。

のそれぞれをどのような場面で言うか，初級日本語学習のどこかの時期で教えたい。

㊼～㊿は，別れの挨拶。

V　日記（2）

場面Ⅰの日記に応ずるこの場面Ⅱの日記で映画はしめくくられる。少年の日記に記された今日一日のことは，少年の思い出の一ページとなることであろう。

(61)修善寺のもみじは，とてもきれいでした。

(62)天気もよくて，楽しい一日でした。

⑥1は，この映画の一方の主題である「もみじ」についてそれを想起して述べている。⑭と比較されたい。

⑥2は，もう一方の主題である「楽しい」「一日」についてそれを想起して述べている。両方とも文末が「でした」で結ばれている。

「一日」とは，午前零時から午後十三時まで，あるいは起床から就寝までの間を指して言う。ここでは後者である。つまりもみじを見に行くために朝早く起きた時から始まって，家に帰り着き，日記を書き，やがてベッドに就くまでが少年の一日である。映画は，少年のこの「一日」を描いたわけである。

⑥2の「天気もよくて」の「も」は「天気」を強調する言い方で，「天気もよくて」全体が「楽しい一日」を一層明瞭化するために一方でこういう要素もあった，という意味を表している。天気がよいことで楽しい一日が更にひきたった，というニュアンスである。「よくて」は形容詞「よい」の連用中止法で，次に文が続いていく。「よくて」は「よく」でもよいが，「よくて」の方が口語的である。

なおこの映画では一方で「いい」が使わている。「いい」と「よい」では用法上どんな違いがあるか。

「『いい』は終止形・連体形だけで（略），『よい』の活用系列の中に位置を占めていると見ることができる。終止形・連体形の『よい』は，文章語（書きことば）とか，改まった言い方などには使われるが，日常の話しことばでは，あまり使われない。」（永野賢，1958，『学校文法概説』，朝倉書店）

この映画でも会話内では「よい」ではなく「いい」が使われていた。「よくて」は日記（書きことば）に表れたが，これはもちろん会話内でも「よくて」であって「いくて」という形はない。

2.3. 語句，語法，文型

2.2 では，映画の各場面に即して言語表現上の問題やそこでの映像の役割りについて述べてきた。ここでは，まず「です」「でした」「でしょう」の用法上の問題点や，「だ」対「です」，「です」対「のです」の問題に簡単に触れ，それからその他の重要学習項目にも順に触れてみることにする。

2.3.1. 「です」「でした」「でしょう」

「です」は，この基礎篇第一課以来ずっと続いてきた学習項目である。「____は____です」の文型で，名詞文，形容詞文，形容動詞文の述部を形成する。「です」は，「____は」で示される事柄の実体や属性についてその判断を断定的に表すものである。「でした」「でしょう」は，この「です」の変化形である。「でした」は，「です」の肯定判断が現在・未来の事柄に関して用いられるのに対し，基本的には過去の事柄に関して用いられる。これは，本質的には「た」の用法の問題である。

こうした「です」「でした」に対し，「でしょう」は現時点における話し手自身の不確かな判断や推量を表すのに用いられる。ただ「でしょう」は動詞にも接続し，「です」「でした」とは違った性格を示しているので別に考えてみる必要がある。

「です」「でした」「でしょう」の否定形がどのようになるか見てみると，それぞれ次のようである。

肯定形		否定形
○「です」	⟶	「では（じゃ）ありません」
○「でした」	⟶	「では（じゃ）ありませんでした」
○「でしょう」	⟶	「では（じゃ）ないでしょう」

2.3.2. 「だ」と「です」

「だ」体は，常体（あるいは，普通体），「です」体は，敬体（あるいは，ていねい体）として一般に取り扱われる。そして「です」「でした」「でしょ

う」とパラレルな形としては，「だ」「だった」「だろう」がある。「だろう」は，「でしょう」と同様に動詞にも接続し，「だ」「だった」とは違った性格を示している。ただこの映画中には，「だろう」は登場していない。

「だ」「だった」「だろう」の否定形は，それぞれ次のようになる。

○「だ」　　⟶「で（は）ない」

○「だった」　⟶「で（はなかった）」

○「だろう」　⟶「で（は）なかろう」

それぞれの否定形を見るに形容詞「ない」の変化形がポイントになっている。形容詞文における文末の言い方がさまざまに関係してくるわけである。

「です」体で続けてきた初歩日本語学習にどうこの「だ」体を組み込んでいくかは，難しい問題である。「だ」体，「です」体の相違に目を向けると「である」体や「であります」体，また「でございます」体の問題も浮かび上がってくる。したがって日本語における表現の枠組全体を考え，その上で必要と思われる表現文型をうまく組み込んでいくという手順が望まれることになる。

2.3.3.　「です」と「のです」

「です」がすでに述べた通り，ある事柄の実体や属性についての判断を断定的に表すのに対し，「のです」は更にその判断の根拠や理由を強調した形で断定する。林　大（「ダとナノダ」，『口語文法の問題点』（講座　現代語　第六巻），1964，明治書院）は，「説明用，説得用のことば」としての側面があるとしている。この「のです」の理解についてどのような学習順をとるのが望ましいか，簡単にふれてみる。

a　「のですか」

「のですか」は，本人が見たり，聞いたりしたことについて相手にその説明を求めようとするものである。

〔21〕（修善寺についていろいろ話が交わされるのを聞いていた少年が，

それをきっかけに修善寺までの遠さを話題にして）

「修善寺は遠いんですか。」

〔22〕（熱心に作業に打ち込む陶工を見て見学者が）

「何を作っているんですか。」

b　「のですか」に対する返答としての「のです」

「のですか」と聞かれたからといって「のです」で返答する必要はない。「のです」で答えたとすれば相手の質問に本人が理由や根拠を強調し，説明・説得しようとしたからである。

〔23〕
- a「修善寺は遠いんですか。」
- b「（相手にきちんと説明を与えようと思い，たとえば地図を見せて）ほら，こんなに遠いんですよ。」
- b'「ええ，遠いですよ。」

〔24〕
- a「何を作っているんですか。」
- b「（相手にはっきり納得してもらおうと思い，たとえば自分の作っていたものを見せながら）皿なんです。」
- b'「皿です。」

c　先行する文に続く文としての「のです」

先行する文で表現されたことを補足してそれに説得的説明を与えようとする。

〔25〕「この店は安いですね。さっきの店は安くなかったんですね。」

〔26〕「ちょうど四時間かかりました。やっぱり遠かったんですね。」

d　先行する文のない「のです」

先行する文がないだけでそれに相当する前提があり，それを補足してそれに説得的説明を与えようとする。この場合の前提とは「したこと，あるいは，話し手の状態（元気がないとか，外出の身支度をしているとか）」（久野暲，1972，「ノデス」『日本文法研究』大修館）である。

〔27〕（修善寺でおみやげを買ってもらったことに関して）「修善寺でおみやげを買ったんです。」

〔28〕（朝，修善寺行きの準備をしながら）「今日は，もみじ見物に行くんです。」

以上の「のです」の説明については上記久野論文を参考にした。

「のです」は，「です」と同様に「のでした」「のでしょう」等の変化形がある。また「だ」対「です」の関係からは，「のだ」「のだった」「のだろう」の形がある。そして話しことばでは「んです」の形で実現することが多い。この映画でも「んです」の形が選ばれている。

2.3.4. 「に」と「へ」

「学校へ行く」等の文での「へ」は，動作・作用の向けられる方向を示し，「学校に着く」等の文での「に」は，動作・作用の及ぶ所，帰着点を示すが，この「へ」「に」は厳密に区別して用いられているわけではない。つまり「学校に行く」も「学校へ着く」も普通に言われる文である。

ところで「目的語＋に＋行く/来る」の文型で目的を示す「に」は，「へ」に代えて言うことができるであろうか。すでに述べた通りこの文型で目的語部分は，動詞の連用形，あるいは「行く/来る」という動作の目的にふさわしい名詞である。前者の場合には，一般的に言って「へ」に代えて言うことができないが，後者の場合には，動詞部分が「行く」であれば「へ」も可能な場合がありそうである。

次の例は，どうであろうか。

〔29〕 買物 / おみまい } { に / へ } 行く

次の例では，「へ」は不可能のようである。

〔30〕 食事
勉強 } に行く
旅行

したがってこの「____に行く/来る」の文型学習の際には，「学校へ（に）行く」や「学校に（へ）着く」と違って，「に」と「へ」の交替が可能でないとしておいた方がよさそうである（わざわざ，そう教える必要はないが）。

「に」の学習は今後ずっと続いていくものなので，「に」の用法はその都度きちんと学習しておく必要がある。

2.3.5. 「ごろ」「ぐらい」

「ごろ」，あるいは「ころ」は，「頃」と書く。「頃」は，名詞として用いられる場合と接尾辞として用いられる場合とがある。前者は「ころ」であるが，後者は「ころ」，「ごろ」両方に言われる。

名詞の「ころ」はだいだいの時を意味し，連体修飾成分を伴って用いられるのが一般的である。

〔31〕 子供のころ，修善寺へもみじを見に行きました。

〔32〕 今が一番楽しいころです。

〔33〕 そろそろ吉田さんが迎えに来るころです。

「こ・そ・あ・ど」は，「この・その・あの・どの」に「ころ」がつく。ただ最近という意味では，「このごろ」と言う。

接尾辞の「ころ」「ごろ」は，ある時をその前後も含めて漠然と示す他に，ある事にちょうどよい時期であることを示す用法もある。「ごろ」とだけ発音されるものには，次のようなものがある。「日ごろ」「食べごろ」「今ごろ」「見ごろ」「手ごろ」「近ごろ」「中ごろ」「先ごろ」等である。「一頃」は，「ひところ」である。「ころ」で始まる語には，「ころあい」がある。

なお「（お）昼ごろ」「夕方ごろ」はあるが，「朝ごろ」は言わない。また「あしたごろ」はあるが，「きのうごろ」は言わない。「きょうごろ」は，ど

うであろうか。「けさごろ」「ゆうべごろ」も言わない。

「ぐらい」，あるいは「くらい」は，「位」と書く。

「位」は本来名詞であるが，副助詞としても用いられる。副助詞の「位」は，ここで学習した数量や基準の大体の見当を示す用法の他に，比較の対象となるものを例示的にあげて程度を示す用法がある。「くらい」「ぐらい」の使い分けについては，湯沢幸吉郎の『江戸言葉の研究』(1954，明治書院）を引用しつつ『日本文法大辞典』(松村　明編，1971，明治書院)が次のように説明している。

「『くらい』『ぐらい』の使い分けは，江戸語では，体言には『ぐらい』，『こ（そ・あ・ど）の』には，『くらい』が普通であり，活用語にはどちらも着くが，『ぐらい』のほうが多かったようである。(略）現代語では，「こ（そ・あ・ど)の」や活用語につく場合には，『くらい』を用いる方が普通である。」

したがって体言につく場合には，「くらい」「ぐらい」両方ともよいということになろう。なお「こ・そ・あ・ど」に関しては,「この・その・あの・どの」，「これ・それ・あれ・どれ」に「くらい」「ぐらい」がつく。

2.3.6.　「月」「日」の言い方

「月」名の言い方，また「日」付けの言い方については，初級段階のどこかの時期に徹底した反復練習が必要である。「時」「分」及び「(所要)時間」の言い方については第五課で，「秒」の言い方については第七課で，また「曜日」の言い方については第八課でそれぞれ触れた。

ここでは，映画中に表れたのは「十一月二十三日」のみであるが，それをきっかけとして一月から十二月までの言い方と一日（ついたち）から三十一日までの言い方を学習の中に組み込みたい。

「月」名の言い方は，「いち，に，さん，……」の基本数の言い方が数の数え方そのままであるから「月」が「がつ」(「が」は鼻濁音）であることを

学習することで，それほどの困難はなかろう。

「月」名の言い方に比べると，「日」付けの言い方の学習には難しさがある。基本数の言い方として「ヒ，フ，ミ，……」を用いるが，「ついたち」は別である。その後，「ふつか」「みっか」「よっか」「いつか」「むいか」「なのか」「ここのか」「とおか」とと続く。ここまでの助数詞部分は「か」である。以後の助数詞部分は「じゅういちにち」のように「にち」になる。数え方も「いち，に，さん，……」の系列に合流する。ただし，十四日は「じゅうよっか」，二十四日には「にじゅうよっか」であり，また二十日は「はつか」である。

なお月日の言い方に関連してある事をするのに要する月数，日数の言い方も学習しておきたいところである。この映画中の「一日」(いちにち)は，その例である。

〔34〕 この本を読むには，一日かかります。

2.3.7. 時を表す名詞

この映画中の「今日」「朝」「今」「昔」等は，時を表す名詞である。たとえば「今日の出来事」「朝から夜まで」「今が大事だ」「昔を想い出す」のように用いられる。またこれらは副詞的に，あるいは副詞に転化して用いられる。

〔35〕 今日，修善寺へ行きました。(①')

〔36〕 朝，早く起きました。(②)

この「今日」「朝」を強調，特定化し，主題に取り立てれば，

〔35〕' 今日は，修善寺へ行きました。

〔36〕' 朝は，早く起きました。

となる。ただ次の，

〔37〕 昔，あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいました。

のように文全体が単に叙述である場合には「昔」を「昔は」と取り立てて言うことができない。対比のニュアンスが加わり，強調し，特定化する時には次

のように言える。

〔38〕 昔は，不便でした。今は，便利です。

時の名詞の主題化は，そのまま主語となることもある。

〔39〕 今日は，いいお天気です。(⑤')

主語となっている場合には，「は」を省いて言うことはできない。時を表す名詞については更に考察が必要であるが，十分にわかっていない項目である。

2.3.8. 接頭辞の「お」

この映画には「天気」対「お天気」，「店」対「お店」の使い分けがある。接頭辞の「お」(それから「ご」) の学習をどこまで広げるかは，一つの大きな問題である。「お」「ご」についての使い分けの基準は，「これからの敬語」(1952，文部省) によると次のようである。

一， つけてよい場合

㈠ 相手の事物を表す（略）場合。

㈡ 真に尊敬の意を表す場合。

㈢ 慣用が固定している場合。

㈣ 自分の事物ではあるが，（略）慣用が固定している場合。

二， 省けば省ける場合

三， 省くほうがよい場合

つけてよい場合の㈢は，今までの映画にも度々出ているものである。省けば省ける場合のものについては，「お」使用に関しての男・女差の問題，また書き言葉・話し言葉での違い等の観点から個々の例で扱い，やがては敬語の学習の中に組み込み，つけてよい場合の㈠㈡㈣の学習にも進み，その際省くほうがよい場合のものもきちんと学習させるという順をとることになろうか。いずれにしろ，どこかの時期に全体的な学習が必要となるものである。それまでは個々の例の実際を教えておくことになろう。

3. この映画の効果的な利用のために

メデイアが映画（16ミリ，8ミリ），ビデオであるこの映像教材をどう効果的に活用したらよいかについては，この映画解説1で全般的な概説をした。この映画の利用にあたってもそちらをぜひ参照してほしい。

映画利用にあたっての事前，事後学習に資料1．の「使用語彙一覧（かな書き）」や資料2．の「シナリオ全文（かな書き）」を効果的に利用すれば，映画活用の効果も大きいものになると思われる。資料1．，2．を映画と組み合わせることでいろいろな利用の道がひらけることと思う。

3. 1. 学習基本文型の整理

この課での学習文型を中心にしながら，第一課以来この課まで学習が続いてきた基本文型について今後の学習の展望も踏まえ，整理してみようと思う。名詞文，形容詞文，形容動詞文，動詞文の順にそれぞれ，敬体，常体，また「だろう」「でしょう」や，「のです」での言い方を眺めてみる。

以後認め難い言い方には(✓)印を，取り扱いの難しい形には(？)印をつけることにする。

3. 1. 1. 名詞文

a．敬体（「です・ます」体）

「天気です」を例に考えてみると，名詞文での述部は次のようになる。

で す 形	ま す 形	ま す・で す 混 合 形
天気です	天気であります	天気でありますです(？)
	天気で(は)ありません	天気で(は)ありませんです

天気でした	天気でありました	天気でありました{ です（？） でした（？）
		天気で(は)ありませんでした

「です形」を見ていくと，「ます」に対して「ません」があるのとは違って「です」には「でせん」がないことがまず目につく。そこで補助動詞「ある」を介した「ます形」の「で(は)ありません」を否定形とするわけだが，「ます形」には「であります」がある。「です」「であります」の両形とも話し言葉で使われるものであるが，後者は講演で用いられる等，前者に比べると特殊である。これは，「でした」「でありました」の関係においても同様である。

「ます・です混合形」は（？）が二形あるが，ともかく四形，そろっているものである。最後の「で（は）ありませんでした」は，完全に定着した形である。敬体における名詞文の述部を今まで名詞とそれに接続する「です」及び「です」の変化形で形成すると簡単に言ってきたが，実は「です形」は充分自立したものではないのである。「ます形」及び「ます・です混合形」との組み合わせからなっている。

b．常体（「だ」体）

だ　　形	な　い　形
天気だ	
	天気で（は）ない
天気だった	
	天気で（は）なかった

「だ形」は「だ」「だった」であり，「です形」の場合と同じである。否定形は形容詞「ない」を補って表現することになるが，ただ「なかった」には補助動詞「ある」も組み込まれているわけで，敬体での「ます形」同様に「ある」の役割には大きなものがある。

次のc，dは，上記a，bでの言い方を土台にした発展的理解となる。

c．「だろう」「でしょう」

「だろう」「でしょう」は表現上の待遇的問題を別にすれば同じ性格を示す。ここでは上記の敬体との接続関係を検討することは省いて，一般的に問題になる常体との接続関係を検討してみる。

天気だ（✓）{だろう／でしょう}	
	天気で（は）ない {だろう／でしょう}
天気だった {だろう／でしょう}	
	天気で(は)なかった {だろう／でしょう}

「天気だ」に「だろう」「でしょう」を接続させることはできない（その場合には「だ」をとり，接続させる）が，それ以外は可能である。「だっただろう」は，言ってみれば「だ形」が重なり合って用いられていることになる。こうした点で「だろう」「でしょう」は，「だ」「です」と異質の性格を示していることがわかる。

d．「のです」

「のです」は表現上の待遇問題も考慮すると，「のだ」も加えて検討しなくてはならないが，ここでは，それを考えない。また敬体との接続関係の問題も省く。

天気だのです(✓)	
	天気で（は）ないのです
天気だったのです	
	天気で（は）なかったのです

「だろう」「でしょう」の場合と同様に「天気だ」に「のです」を接続させることはできない。その場合には「だ」を「な」に変えて，つまり連体形にして接続させることになる。「の」が体言としての性格を持っているからである。

3. 1. 2. 形容詞文

a．敬体（「です・ます」体）

「楽しいです」を例に考えると，形容詞文での述部は次のようになる。

<table>
<tr><th colspan="3">で す 形</th><th rowspan="2">ま す 形</th><th rowspan="2">ます・です混合形</th></tr>
<tr><th>1．</th><th colspan="2">2．</th></tr>
<tr><td>楽しい
です</td><td>楽しい</td><td rowspan="4">です</td><td>楽しく
あります</td><td>楽しくありますです(?)</td></tr>
<tr><td></td><td>楽しく
ない</td><td>楽しく
ありません</td><td>楽しくありませんです</td></tr>
<tr><td>楽しい
でした</td><td>楽し
かった</td><td>楽しく
ありました</td><td>楽しくありました { です(?) / でした(?)</td></tr>
<tr><td></td><td>楽しく
なかった</td><td></td><td>楽しくありませんでした</td></tr>
</table>

形容詞文の言い切りの形は，やっかいで複雑である。したがって（✓）や（?）をなかなかつけにくい。「です形」には二種のものが考えられる。「です」の変化形によるものと，形容詞自体の変化形に「です」がつくものである。「楽しいです」は，「これからの敬語」でこれからは認めてもよい形とさ

れたものだが，依然として異和感を持つ向きも多いと考えられる。また「楽しいです」は認めても「楽しいでした」は認め難いとする人もあると思われる。

この基礎篇第三課の形容詞導入映画では，「楽しい」（常体での言い切り）と「楽しいです」「楽しくないです」を採用していた。この第十課ではその学習を拡張して「です形」の2.の系列に「ます形」の「楽しくありません」，「ます・です混合形」の「楽しくありませんでした」を学習に加えている。つまり以下の形を形容詞文として認めているわけである。

○楽しいです

○楽しくないです／楽しくありません

○楽しかったです

○楽しくなかったです／楽しくありませんでした

b．常体（「だ」体）

形容詞文の敬体，常体はパラレルな関係にはない。つまり形容詞に「だ」「だった」の接続する形はない。形容詞文の常体は，上記「です形」の2.から「です」を取り除いたものである。

い　　形	な い 形
楽 し い	
	楽しくない
楽しかった	
	楽しくなかった

「楽しかった」「楽しくなかった」とも補助動詞「ある」を介して表現さ

れるものである。

c．「だろう」「でしょう」

「だろう」は「だ」が形容詞の常体に接続できないのと違って異和感なく形容詞の常体に接続する。また形容詞に「です」の接続を認め難い人でも「でしょう」の接続には抵抗感がないであろう。

楽しい {だろう / でしょう	
	楽しくない {だろう / でしょう
楽しかった {だろう / でしょう	
	楽しくなかった {だろう / でしょう

d．「のです」

形容詞の常体に「のです」を加えることには何の問題もない。

楽しいのです	
	楽しくないのです
楽しかったのです	
	楽しくなかったのです

e．その他

形容詞の用法としては，この映画では他に次のようなものがある。

◎　連体修飾の用法……「いいお天気」や「楽しい一日」の「いい」や「楽しい」であるが，この用法はすでに第三課で学習した。

◎　連体修飾の用法……「早く起きる」の「早く」がその例である。

「____く」の形をとる。この用法にも習熟させたい。なお「広くなる」の用法については別の課での学習が予定されている。

◎　中止法の言い方……「安くて，いい品」や「天気がよくて，楽しかった」での「安くて」や「よくて」である。「____くて」の形をとる。上の例では，前者が二つの形容詞を連体修飾として並べる場合の言い方，後者は二文を結合させる時の言い方である。これらの用法についても練習を積み重ねて理解をしっかりさせておきたいところであるが，ここでは形式の導入に重点があり，本格的な学習は今後の課題となる。

3. 1. 3.　形容動詞文

形容動詞文については，形容動詞（の語幹）を準名詞と認める立場もあるほどだから，名詞文の場合と全く問題が同じである。以下「きれいだ」を例にして述べる。

a．敬体（「です・ます」体）

で す 形	ま す 形	ま す・で す 混 合 形
きれいです	きれいであります	きれいでありますです(?)
	きれいで(は)ありません	きれいで（は）ありませんです
きれいでした	きれいでありました	きれいでありました {です(?) でした(?)}
		きれいで（は）ありませんでした

b．常体（「だ」体）

だ 形	な い 形
きれいだ	

	きれいで（は）ない
きれいだった	
	きれいで（は）なかった

c．「だろう」「でしょう」

きれいだ(✓) {だろう / でしょう	
	きれいで（は）ない {だろう / でしょう
きれいだった {だろう / でしょう	
	きれいで(は)なかった {だろう / でしょう

名詞文の場合と同様に「きれいだだろう／でしょう」（✓）は，「きれいだろう／でしょう」である。

d．「のです」

きれいだのです(✓)	
	きれいで（は）ないのです
きれいだったのです	
	きれいで（は）なかったのです

名詞文の場合と同様に「きれいだのです」（✓）は，「きれいなのです」となる。

3. 1. 4. 動詞文

動詞「行く」を例にして以下述べていく。

a．敬体（「です・ます」体）

<table>
<tr><th colspan="3">で　す　形</th><th rowspan="2">ま す 形</th><th rowspan="2">ます・です混合形</th></tr>
<tr><th>1.</th><th colspan="2">2.</th></tr>
<tr><td>行くです（✓）</td><td colspan="2">行く（✓）</td><td rowspan="4">です</td><td>行きます</td><td>行きますです（?）</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">行かない</td><td>行きません</td><td>行きませんです</td></tr>
<tr><td>行くでした（✓）</td><td colspan="2">行った（?）</td><td>行きました</td><td>行きました {です（?）／でした（✓）}</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">行かなかった</td><td></td><td>行きませんでした</td></tr>
</table>

動詞文での言い切りの形もなかなか難しく，（✓）や（?）が簡単につけにくい。「です形」のうち1. の動詞に「です」「でした」がつく形は，認め難いところであるが，動詞の常体に「です」のついた「です形」のは，「行くです」を除けば一般的な形として認められるところである。「ます形」については，動詞の導入をした第五課で学習した。「ます・です混合形」の「行きませんでした」を「ます形」に含めて考えると，動詞文には「です形」「ます形」の両形があることになる。

b．常体

（u）　形	な　い　形
行　く	
	行かない
行 っ た	

	行かなかった

「行った」は，動詞の音便形の学習が前提となる。第十一課以後の大きな学習項目の一つである。

c．「だろう」「でしょう」

行く {だろう / でしょう	
	行かない {だろう / でしょう
行った {だろう / でしょう	
	行かなかった だろう / でしょう

「だろう」「でしょう」の動詞の常体への接続には，別に問題はない。この用法については，「らしい」「ようだ」等の用法とともに第十九課で取り扱う予定である。

d．「のです」

行くのです	
	行かないのです
行ったのです	
	行かなかったのです

動詞の常体に「のです」が接続する言い方は，この課で登場した形容詞の常体に「のです」がつく言い方の発展的学習として次の第十一課で取り上げる。

3. 2. 語彙の総復習

第一課から第十課までの語彙について整理，一覧にしたものをここに掲げる予定であったが，かなりの量になるのでここでは省き，別に「日本語教育映画解説別冊」として刊行することにする。したがってここでは，その予告をすることだけになる。

3. 3. 練習問題

まず名詞文，形容詞文の述部の言い方の練習から始める。形容詞の副詞的用法や連用中止の言い方もここで練習しておく。

A—1　例にならって，「です」「でした」「でしょう」を付けて言いなさい。

（例）おてんき——→おてんきです　おてんきでした　おてんきでしょう

a．このいえ　b．そのみせ　c．あのくるま　d．このあたり　e．そちらのほう　f．あちら　g．むこう　h．ほかのちず　i．さっきのみせ　j．むこうのみせ

A—2　上のa～jをそれぞれ否定形で言いなさい。

（例）おてんき——→おてんきではありません　おてんきではありませんでした　おてんきではないでしょう

B—1　例にならって，「です」「でした」「でしょう」を付けて言いなさい。

（例）きれい——→きれいです　きれいでした　きれいでしょう

a．にぎやか　b．しずか　c．べんり　d．ふべん　e．じょうず　f．へた　g．すき　h．きらい　i．げんき　j．だいじょうぶ

B—2　上のa～jをそれぞれ否定形で言いなさい。

（例）きれい——→きれいではありません　きれいではありませんでした

きれいではないでしょう

C－1　例にならって，「です」「でしょう」で言いなさい。

（例）たのしい⟶たのしいです　たのしかったです　たのしいでしょう

a．はやい　b．おそい　c．あかるい　d．くらい　e．いい　f．わるい　g．とおい　h．ちかい　i．たかい　j．やすい　k．すくない　l．おおい　m．すばらしい　n．さびしい　o．めずらしい

C－2　上のa～oをそれぞれ否定形で言いなさい。

（例）たのしい⟶たのしくないです　たのしくなかったです　たのしくないでしょう

C－3　上のa～oを次の例に従って言いなさい。

（例）たのしい⟶たのしく　たのしくて　たのしくありません　たのしくありませんでした

C－4　上のa～oを次の例にならって「んです」を付けて言いなさい。

（例）たのしい⟶たのしいんです　たのしくないんです　たのしかったんです　たのしくなかったんです

D－1　例にならって，「だ」「だった」「だったでしょう」を付けて言いなさい。

（例）てんき⟶てんきだ　てんきだった　てんきだったでしょう

a．このいえ　b．そのみせ　c．あのくるま　d．このあたり　e．そっちのほう　f．あっち　g．むこう　h．ほかのちず　i．さっきのみせ　j．むこうのみせ

D－2　上のa～jをそれぞれ否定形で言いなさい。

（例）てんき⟶てんきではない　てんきではなかった　てんきではなかったでしょう

E—1　例にならって，「だ」「だった」「だったでしょう」を付けて言いなさい。

（例）　きれい——→きれいだ　きれいだった　きれいだったでしょう

a．にぎやか　b．しずか　c．べんり　d．ふべん　e．じょうず f．へた　g．すき　h．きらい　i．げんき　j．だいじょうぶ

E—2　上のa．～j．をそれぞれ否定形で言いなさい。

（例）　きれい——→きれいではない　きれいではなかった　きれいではなかったでしょう

次に「月」「日」の言い方を練習しよう。

F—1　例にならって，言いなさい。

（例）　こんげつ／せんげつ　は，［いちがつ］　です。／でした。

a．にがつ　b．さんがつ　c．しがつ　d．ごがつ　e．ろくがつ f．しちがつ　g．はちがつ　h．くがつ　i．じゅうがつ　j．じゅういちがつ　k．じゅうにがつ

F—2　例にならって，言いなさい。

（例）　きょう／きのう　は，［じゅういちにち］　です。／でした。

a．ついたち　b．ふつか　c．みっか　d．よっか　e．いつか f．むいか　g．なのか　h．ようか　i．ここのか　j．とおか k．じゅうににち　l．じゅうさんにち　m．じゅうよっか　o．じゅうごにち　p．はつか　q．にじゅうよっか

次に「____にいく／くる」の言い方の練習をしよう。

G．例にならって，言いない。

（例）　みんなで［み］に｛いきました。／きました。

a．たべる　b．のむ　c．よむ　d．ねる　e．のる　f．むかえる　g．する　h．べんきょうする

次に「ごろ」「ぐらい」の言い方を練習しよう。

H—1　例にならって，言いなさい。

（例）　Q：「なんじごろ，つきますか。」

A：「［いちじごろ］です。」

a．にじ　b．さんじ　c．よじ　d．ごじ　e．ろくじ　f．しちじ　g．はちじ　h．くじ　i．じゅうじ

H—2　例にならって，言いなさい。

（例）　Q：「なんじかんぐらい，かかりましたか。」

A：「［いちじかんぐらい］でした。」

a．にじかんb　．さんじかん　c．よじかん　d．ごじかん　e．ろくじかん　f．しちじかん　g．はちじかん　h．くじかん　i．じゅうじかん

最後に総合練習をしよう。

I－1　例にならって，言いなさい。

（例）むかしは，［とおかったです。］
いまは，［ちかいです。］

a．いい（よい），わるい　b．おおい，すくない　c．たかい　やすい　d．おそい，はやい　e．さびしい，にぎやか　f．ふべん，べんり　g．きたない，きれい　h．おみせ，がっこう　i．こうえん，ホテル

I－2　例にならって，言いなさい。

（例）きょうは，みんなで［もみじをみ］にいきます。

a．おすしをたべる　b．なまビールをのむ　c．（としょかんへ）あたらしいじしょをみる　d．（はねだへ）ともだちをむかえる　e．（としょかんへ）べんきょうする

I－3　例にならって，上のa～eを言いなさい。

（例）きのうは，みんなで［もみじをみ］にいきました。

J－1　例にならって，言いなさい。

（例）O：「たぶん，［いいおてんき］でしょうね。」
A：「そうでしょうね。」

a．たのしい　b．めずらしい　c．すばらしい　d．ふべん　e．きれい　f．いいいろ　g．いいしなもの　h．むかしのちず

J－2　例にならって，上のa～hを言いなさい。

（例）Q：「ね，［やすい］でしょう。」
A：「そうですね。」

K—1　例にならって，言いなさい。

（例）
Q：「 とおい んですか。」
A：「そんなに とおく ありませんよ。」

a．すくない　b．たかい　c．はやい　d．たのしい　e．さびしい　f．すばらしい　g．めずらしい

K—2　例にならって，上のa・—g．を言いなさい。

Q：しゅぜんじは，「 とおい んですか。」

A：「そうですね，そんなに とおく ありませんよ。」

L　例にならって，言いなさい。

（例）
「むこうには，いちじごろつきます。」
「そうすると，くるまで いちじかん ぐらいですね。」

a．にじかん　b．さんじかん　c．よじかん　d．ごじかん　e・ろくじかん　f．しちじかん　g．はちじかん　h．くじかん　i．じゅうじかん

M　例にならって，言いなさい。

（例）「さあ，そろそろ， かえり ましょう。」

a．いく　b．おきる　c．おすしをたべる　d．なまビールをのむ　e．（はねだへ）ともだちをむかえる　f．（としょかんへ）べんきょうする

N　例にならって，言いなさい。

（例）「むかしは，とても さびしかった んでしょうね。」

「そうですね。いまは，［にぎやか］ですね。」

a．いい（よい），わるい　b．おおい，すくない　c．たかい，やすい　d．おそい，はやい　e．ふべん，べんり　f．きたない，きれい

3．4．　映画場面を使っての練習

あの家族の一員である少年になったつもりで映画場面を想起しながら，実際に会話をしてみるのがよい。設定は，もみじ見物である。

A．　車の中で

まず，少年と同じ立場にたってあれこれ質問してみよう。もちろん，少年が実際にした以上の質問を加えていい。質問の相手は，吉田（にあたる人），父，母である。

B．　修善寺で

○　実際にもみじ見物をしているつもりで，もみじをいろいろ観賞してみよう。

○　実際に公園で小休憩しているつもりで，古地図を見ながら昔と今の修善寺について話し合ってみよう。

○　実際におみやげ屋で（そう想定して）あれこれ品物を見てみよう。品物は，何でもよい。また実際に店員（そう想定した人）と品物を買う練習をしてみよう。

C．　家の前で

実際に別れの挨拶の練習をしてみよう。実例は，この映画以外に第四課「きりんは　どこに　いますか」がある。また出会いの挨拶の練習を加えてもいい。

設定をもみじ見物以外に求めれば，郊外へのピクニック等，いろいろなものが考えられるが，ある主題を決め，この映画での言語場面とそこでの言語

表現をなるたけ生かしながら実際に練習してみるのもおもしろいだろう。

3. 5. 進んだ段階での利用法

これは，ある少年のある「一日」の出来事である。映画を十分理解した後で，次のような利用法が考えられる。

A. 登場人物になったつもりで会話をしてみよう。(先生も含め，学習者が役割を分担すればよい。)

B. この少年になったつもりで全ての行動を言ってみよう。

C. この映画の話をナレートしてみよう。

D. この少年のつもりで今日「一日」のことを日記に書いてみよう。

他に映画での主題を利用して，次のような主題で会話したり，ナレートしたり，作文を書いてみたりしよう。

E. 私のある一日について

F. 私の楽しい想い出について

G. きれいなもみじ（それに代わるもの）について

より単純な利用法としては，映画の内容をめぐって教師と学習者が対話することが考えられる。映画を繰り返し見る場合には，音声を消して見る方法もある。ビデオが利用できれば，それぞれの役割分担を決めて全く同じ言語表現を吹き込んでみることもできるし，また全ての言語行動についてナレーションを加えることもできる。そうした利用ができれば，学習者は映像をあれこれ楽しみながら実際的な日本語力を身につけていくことができよう。

4. おもな参考文献

遠藤織枝　1980「『美しいでした』の功罪」『言語生活』2月号（338号）

奥津敬一郎　1962「daとdesu—omosiroi desitaは正しいか—」『日本語教育』1号

——　1963「『ダ』による述部代用化—展成文法への試み—」『日本語教育』6号

木村公子　1974「現代語デスの確立」『学習院大学国語国文学会誌』

久野　暲　1972「ノデス」『日本文法研究』大修館

小島俊夫　1964「後期江戸語における『デス』・『デアリマス』・『マセンデシタ』」『国語学』39号

坂谷裕子　1978「形容詞につく『です』について」『昭和学院国語国文』

阪田雪子　1977「日本語の文の構造と文型指導」『講座日本語教育』13号

桜井光昭　1972「マス（デス）による敬語表現の最低規準」『学術研究—国語・国文学編—』21巻

佐治圭三　1972「『ことだ』と『のだ』」『日本語日本文化』3号

菅野　謙　1964「『降るでしょう』と『降りましょう』」（講座現代語6）明治書院

鈴木勝忠　1960「雑俳ノート『です』」『国語と国文学』

鈴木英夫　1972「指定の助動詞」『助動詞Ⅰ』（品詞別日本文法講座7）

辻村敏樹　1964「面白かったです，面白いでした」『ゆれている文法』（口語文法講座　3）　明治書院

土屋信一　1979「ことばの質問箱」『言語生活』12月号（336号）

——　1980「ことばの質問箱」『言語生活』1月号（337号）

徳川宗賢・宮島達夫　1972『類義語辞典』東京堂出版

永野　賢　1958『学校文法概説』朝倉書店

中村通夫　1935「『です』の語史について」『国語国文学』
1948　「明治初年の東京語」『東京語の性格』
林　大　1964　「ダとナノダ」『口語文法の問題点』（講座現代語　6）明治書院
——　1964　「『であろう・だろう』の表現価値」『ゆれている文法』（口語文法講座　3）　明治書院
原口　裕　1972　「『デス』の推移—活用語に接続する場合—」『静岡女子大学国文学研究』5号　静岡女子大学国語国文学会
松村　明　1954　『日本文法大辞典』　明治書院
宮地幸一　1969　「助動詞『ます』をめぐる漸移相(一)」『短大論叢』36集　関東学院女子短期大学
——　1969　「助動詞『です』をめぐる漸移相(一)」『短大論叢』38集　関東学院女子短期大学
——　1970　「助動詞『です』をめぐる漸移相(二)」『短大論叢』41集　関東学院女子短期大学
望月孝逸　「『だ』の意味的機能」『千葉大学留学生研究報告六』
森田良行　1974　「動詞文について」『講座日本語教育』10号
——　1976　「文型について」『講座日本語教育』12号
文部省　1952　『これからの敬語』
山口佳也　1975　「『のだ』の文について」『国文学研究』56　早稲田大学
山本正秀　1972　「『デス』の普及について」『近世・近代のことばと文学』
吉川泰雄　1629　「助動詞『です』の発達について」『近代語誌』
——　1962　「デスの起源について」『国学院雑誌』
吉田金彦　1971　「『です』の特質」『現代語助動詞の史的研究』
和久井生一　1972　「日本語研究・『です』論考(一)」『拓殖大学論集』86
——　1972　「日本語研究・『です』論考(二)」『拓殖大学論集』88

和田利政　1964　「『よい』と『いい』」『ゆれている文法』（口語文法講座3）　明治書院

なお形容詞，形容動詞に関しては本解説書3及び6，またそれぞれの参考文献を参照されたい。

資　料

資料1　使用語彙一覧

これは，この映画中に言語表現として現れた全ての語について一覧表にしたものである。資料2のシナリオ全文同様，そのまま教材として活用できることも考慮してかな（ひらがな，かたかな）書きにしてある。

1.　見出し語はアイウエオ順に配列し，そこにその使用文例を全て書き出した。

2.　見出し語の認定については，初級日本語教育の立場に立っている。

2－1　「おくさん」は一語扱いにし見出し語にしている。

2－2　「おてんき」「おみせ」等については，「お」は別語扱いにした。

2－3　形容動詞については，「＿＿な」形を見出し語とした。

2－4　動詞は「ます」を取り除いた形，つまり連用形を見出し語にし，その横に終止形を示した。

2－5　「です」に前接する「ん」は，一語扱いにして見出し語にしている。

2－6　「ました」「ましょう」等，「ます」の変化形は，それぞれ見出し語にしている。

2－7　「でした」「でしょう」等，「です」の変化形は，それぞれ見出し語にしている。

2－8　「だった」等，「だ」の変化形も見出し語にしている。

2－9　形容詞の否定形を作る「ありません」「ありませんでした」は，そのまま見出し語にしている。

2－10　「ございました」を見出し語にしている。

2－11　「いちばん」「ほんとうに」等は，副詞として一語扱いにし見出し語にしている。

2－12　「そうすると」等は，接続詞として一語扱いにし見出し語にして

いる。

2—13　「に」「で」とは別に「には」「では」を見出し語にしている。

2—14　「いらっしゃいませ」「かしこまりました」等慣用的表現として扱ったものは，そのまま見出し語にしている。

3．見出し語の語義，活用変化，他の語との結びつき等により下位分類する場合には，(1)(2)……のようにした。

3—1　形容詞，形容動詞については，その連体修飾的用法，副詞的用法，連用中止法，また述部になる場合によって下位分類してある。

3—2　「が」は，意味的主述を表すもの，対象語を表すもの，その他で下位分類した。

3—3　「で」「ね」もその機能で下位分類してある。

3—4　「です」「ます」及び「だ」とその変化形については，その後に伴う終助詞の種類，またその機能により下位分類してある。

4．使用文例の文頭には，①②……の数字がつけてある。これはシナリオでの文通し番号であり，この解説書全体に共通のものである。同一見出し語内では，この順に文例を提出した。(1)(2)……と下位分類した場合にもその分類内で同一の提出順をとっている。全くの同一文については，通し番号を横に並べ引用を一回ですませた。

5．見出し語の横には，〔　〕で当用漢字の範囲内で漢字を示し，またその横には（　）で語の使用回数を示した。

ああ(1)

⑯ **ああ**，ちょうどよじかんでしたね。

あかるい〔明るい〕(1)

③ そとは，まだ**あかるく**ありませんでした。

あさ〔朝〕(1)

② **あさ**，はやくおきました。

あたり(2)

㉔ えーと，ここは，この**あたり**だね。

㉕ この**あたり**は，むかしは，いえがすくなかったんですね。

あちら(1)

㊶ **あちら**のおみせのほうが，やすかったですね。

あっ(1)

㉟ **あっ**，うまだ。

あの(1)

㊱ ぼく，**あの**うまがほしいな。

ありがとう(3)

㊿ **ありがとう**ございました。

52 おそくまで**ありがとう**ございました。

53 **ありがとう**ございました。

ありません(1)

⑩ いいえ，そんなにとおく**ありません**よ。

ありませんでした(1)

③ そとはまだあかるく**ありませんでした**。

あれ(1)

㊲ **あれ**はたかいよ。

いい(5)

⑤　きょうは，**いい**おてんきですね。

⑥　ほんとうに，**いい**おてんきですね。

⑦　しゅぜんじも，たぶん，**いい**おてんきでしょうね。

㉑　**いい**いろですね。

㉞　いいえ，おくさん，これは，やすくて**いい**しなですよ。

いいえ(3)

⑩　**いいえ**，そんなにとおくありませんよ。

㉞　**いいえ**，おくさん，これはやすくていいしなですよ。

㊳　**いいえ**，たかくないですよ。

いえ〔家〕(1)

㉕　このあたりは，むかしは，**いえ**がすくなかったんですね。

いき，いく(1)

①　じゅういちがつにじゅうさんにち，きょうは，みんなで，しゅぜんじへもみじをみに**いき**ました。

いちにち〔一日〕(1)

㊷　てんきもよくて，たのしい**いちにち**でした。

いちばん〔一番〕(1)

⑳　ええ，いまが**いちばん**きれいですね。

いま〔今〕(3)

⑳　ええ，**いま**がいちばんきれいですね。

㉘　**いま**は，にぎやかだね。

㉚　**いま**は，ずいぶんひろくなりましたね。

いらっしゃいませ(1)

㊻　**いらっしゃいませ**。

いろ〔色〕(1)

㉑　いい**いろ**ですね。

うま〔馬〕(2)

㉟ あっ，**うま**だ。

㊱ ぼく，あの**うま**がほしいな。

うん(3)

⑬ **うん**，そうするとくるまでよじかんぐらいですね。

⑱ **うん**，すばらしいね。

㉓ **うん**。

ええ(1)

⑳ **ええ**，いまがいちばんきれいですね。

えーと(1)

㉔ **えーと**，ここは，このあたりだね。

お(4)

⑤ きょうは，いい**お**てんきですね。

⑥ ほんとうに，いい**お**てんきですね。

⑦ しゅぜんじも，たぶん，いい**お**てんきでしょうね。

㊶ あちらの**お**みせのほうが，やすかったですね。

おき，おきる〔起きる〕(1)

② あさ，はやく**おき**ました。

おくさん〔奥さん〕(1)

㉞ いいえ，**おくさん**，これは，やすくていいしなですよ。

おそく〔遅く〕(1)

㊷ **おそく**までありがとうございました。

おまたせしました〔お待たせしました〕(1)

㊾ **おまたせしました**。

か(2)

⑨ よしださん，しゅぜんじは，とおいんです**か**。

⑪　よしださん，しゅぜんじには，なんじごろつきます**か**。

が(5)

(1)④　ろくじごろ，よしださん**が**くるまでむかえにきました。

㉕　このあたりは，むかしは，いえ**が**すくなかったんですね。

(2)㊱　ぼく，あのうま**が**ほしいな。

(3)⑳　ええ，いま**が**いちばんきれいですね。

㊶　あちらのおみせのほう**が**やすかったですね。

かえり，かえる〔帰る〕(1)

㊶　さあ，そろそろ**かえり**ましょう。

かしこまりました(1)

㊽　はい，**かしこまりました**。

がつ〔月〕(1)

①　じゅういち**がつ**にじゅうさんにち，きょうは，みんなで，しゅぜんじへもみじをみにいきました。

き，くる〔来る〕(1)

④　ろくじごろ，よしださんがくるまでむかえに**き**ました。

きょう〔今日〕(3)

①　じゅういちがつにじゅうさんにち，**きょう**は，みんなで，しゅぜんじへもみじをみにいきました。

⑤　**きょう**は，いいおてんきですね。

㊹　**きょう**は，とてもたのしかったですね。

きれいな(5)

(1)⑲　**きれいな**もみじですね。

(2)⑭　しゅぜんじのもみじは，**きれい**でしょうね。

⑰　**きれい**ですね。

⑳　ええ，いまがいちばん**きれい**ですね。

㊶　しゅぜんじのもみじは，とても**きれい**でした。

ください〔下さい〕(1)

㊼　これを**ください**。

ぐらい〔位〕(1)

⑬　うん，そうするとくるまでよじかん**ぐらい**ですね。

くるま〔車〕(2)

④　ろくじごろ，よしださんが**くるま**でむかえにきました。

⑬　うん，そうすると**くるま**でよじかんぐらいですね。

こうつう〔交通〕(1)

㉛　**こうつう**も，ふべんだったでしょうね。

ここ(1)

㉔　えーと，**ここ**は，このあたりだね。

ございました(3)

㊿　ありがとう**ございました**。

52　おそくまでありがとう**ございました**。

53　ありがとう**ございました**。

この(2)

㉔　えーと，ここは，**この**あたりだね。

㉕　**この**あたりは，むかしは，いえがすくなかったんですね。

これ(5)

㉒　**これ**は，むかしのしゅぜんじのちずですね。

㉜　**これ**は，めずらしいですね。

㉞　いいえ，おくさん，**これ**はやすくていいしなですよ。

㊵　**これ**，どうです？

㊼　**これ**をください。

ごろ(3)

④　ろくじ**ごろ**，よしださんが，くるまでむかえにきました

⑪　よしださん，しゅぜんじには，なんじ**ごろ**つきますか。

⑫　そうですね，むこうには，じゅうじはん**ごろ**つきますよ。

さあ(2)

⑮　**さあ**，つきました。

㊶　**さあ**，そろそろかえりましょう。

さっき(1)

㊺　**さっき**のみせは，やすくなかったですね。

さびしい(1)

㉖　とても**さびしかった**んでしょうね。

さようなら(4)

㊼㊽㊾㊿　**さようなら**。

さん(3)

④　ろくじごろ，よしだ**さん**が，くるまでむかえにきました。

⑨　よしだ**さん**，しゅぜんじは，とおいんですか。

⑪　よしだ**さん**，しゅぜんじには，なんじごろつきますか。

じ〔時〕(3)

④　ろく**じ**ごろ，よしださんが，くるまでむかえにきました。

⑪　よしださん，しゅぜんじには，なん**じ**ごろつきますか。

⑫　そうですね，むこうには，じゅう**じ**はんごろつきますよ。

じかん〔時間〕(2)

⑬　うん，そうするとくるまでよ**じかん**ぐらいですね。

⑯　ああ，ちょうどよ**じかん**でしたね。

しつれいします〔失礼します〕(1)

㊻　じゃあ，**しつれいします**。

しな〔品〕(1)

㉞ いいえ，おくさん，これは，やすくていい**しな**ですよ。

じゃあ(1)

㊻ **じゃあ**，しつれいします。

じゅう〔十〕(1)

⑫ そうですね，むこうには，**じゅう**じはんごろつきますよ。

じゅういち〔十一〕(1)

① **じゅういち**がつにじゅうさんにち，きょうは，みんなで，しゅぜんじへもみじをみにいきました。

しゅぜんじ〔修善寺〕(7)

① じゅういちがつにじゅうさんにち，きょうは，みんなで，**しゅぜんじ**へもみじをみにいきました。

⑦ **しゅぜんじ**も，たぶん，いいおてんきでしょうね。

⑨ よしださん，**しゅぜんじ**は，とおいんですか。

⑪ よしださん，**しゅぜんじ**には，なんじごろつきますか。

⑭ **しゅぜんじ**のもみじは，きれいでしょうね。

㉒ これは，むかしの**しゅぜんじ**のちずですね。

㊶ **しゅぜんじ**のもみじは，とてもきれいでした。

ずいぶん(1)

㉚ いまは，**ずいぶん**ひろくなりましたね。

すくない〔少ない〕(1)

㉕ このあたりは，むかしは，いえが**すくなかった**んですね。

すばらしい(1)

⑱ うん，**すばらしい**ね。

せまい〔狭い〕(1)

㉙ みちも，とても**せまかった**んですね。

そう(6)

⑧ **そう**でしょうね。

⑫ **そう**ですね，むこうには，じゅうじはんごろつきますよ。

㉗ **そう**ね。

㊷ **そう**ですね。

㊹ **そう**だね。

そうすると(1)

⑬ うん，**そうすると**くるまでよじかんぐらいですね。

そと〔外〕(1)

③ **そと**は，まだあかるくありませんでした。

そろそろ(1)

㊶ さあ，**そろそろ**かえりましょう。

そんな(1)

⑩ いいえ，**そんな**にとおくありませんよ。

だ(4)

(1)㉟ あっ，うま**だ**。

(2)㉔ えーと，ここは，このあたり**だ**ね。

㉘ いまは，にぎやか**だ**ね。

㊹ そう**だ**ね。

たかい〔高い〕(4)

㉝ **たかい**んでしょうね。

㊲ あれは，**たかい**よ。

㊴ ほかのみせでは，もっと**たかい**ですよ。

㊳ いいえ，**たかく**ないですよ。

だった(1)

㉛ こうつうも，ふべん**だった**でしょうね。

たのしい〔楽しい〕(3)

(1)㊷　てんきもよくて**たのしい**いちにちでした。

(2)㊹　きょうは，とても**たのしかった**ですね。

㊺　**たのしかった**ですね。

たぶん(1)

⑦　しゅぜんじも，**たぶん**，いいおてんきでしょうね。

ちず〔地図〕(1)

㉒　これは，むかしのしゅぜんじの**ちず**ですね。

ちょうど(1)

⑯　ああ，**ちょうど**よじかんでしたね。

つき，**つく**〔着く〕(3)

⑪　よしださん，しゅぜんじには，なんじごろ**つき**ますか。

⑫　そうですね，むこうには，じゅうじはんごろ**つき**ますよ。

⑮　さあ，**つき**ました。

で(3)

(1)④　ろくじごろ，よしださんがくるま**で**むかえにきました。

⑬　うん，そうするとくるま**で**よじかんぐらいですね。

(2)①　じゅういちがつにじゅうさんにち，きょうは，みんな**で**，しゅぜんじへもみじをみにいきました。

でした(3)

(1)㊶　しゅぜんじのもみじは，とてもきれい**でした**。

㊷　てんきもよくて，たのしいいちにち**でした**。

(2)⑯　ああ，ちょうどよじかん**でした**ね。

でしょう(7)

(1)㊸　ね，やすい**でしょう**。

(2)⑦　しゅぜんじも，たぶん，いいおてんき**でしょう**ね。

⑧　そう**でしょう**ね。

⑭　しゅぜんじのもみじは，きれい**でしょう**ね。

㉖　としてもさびかったん**でしょう**ね。

㉛　こうつうも，ふべんだった**でしょう**ね。

㉝　たかいん**でしょう**ね。

です(22)

(1)㊵　これ，どう**です**？

(2)⑨　よしださん，しゅぜんじは，とおいん**です**か。

(3)⑤　きょうは，いいおてんき**です**ね。

⑥　ほんとうに，いいおてんき**です**ね。

⑫　そう**です**ね，むこうには，じゅうじはんごろつきますよ。

⑬　うん，そうすると，くるまでよじかんぐらい**です**ね。

⑰　きれい**です**ね。

⑲　きれいなもみじ**です**ね。

⑳　ええ，いまがいちばんきれい**です**ね。

㉑　いいいろ**です**ね。

㉒　これは，むかしのしゅぜんじのちず**です**ね。

㉕　このあたりは，むかしは，いえがすくなかったん**です**ね。

㉙　みちも，とてもせまかったん**です**ね。

㉜　これは，めずらしい**です**ね。

㊶　あちらのおみせのほうがやすかった**です**ね。

㊷　そう**です**ね。

㊺　さっきのみせは，やすくなかった**です**ね。

㊹　きょうは，とてもたのしかった**です**ね。

㊺　たのしかった**です**ね。

(4)㉞　いいえ，おくさん，これは，やすくていいしな**です**よ。

㊳　いいえ，たかくない**です**よ。

㊴　ほかのみせでは，もっとたかい**です**よ。

では(1)

㊴　ほかのみせ**では**，もっとたかいですよ。

てんき〔天気〕(4)

⑤　きょうは，いいお**てんき**ですね。

⑥　ほんとうに，いいお**てんき**ですね。

⑦　しゅぜんじも，たぶん，いいお**てんき**でしょうね。

㊷　**てんき**もよくて，たのしいいちにちでした。

どう(1)

㊵　これ，**どう**です？

とおい〔遠い〕(2)

⑨　よしださん，しゅぜんじは，**とおい**んですか。

⑩　いいえ，そんなに**とおく**ありませんよ。

とても(4)

㉖　**とても**さびしかったんでしょうね。

㉙　みちも，**とても**せまかったんですね。

㊹　きょうは，**とても**たのしかったですね。

㊶　しゅぜんじのもみじは，**とても**きれいでした。

な(1)

㊱　ぼく，あのうまがほしい**な**。

ない(2)

㊳　いいえ，たかく**ない**ですよ。

㊺　さっきのみせは，やすく**なかった**ですね。

なり，なる(1)

㉚　いまは，ずいぶんひろく**なり**ましたね。

なん〔何〕(1)

⑪　よしださん，しゅぜんじには，**なん**じごろつきますか。

に(2)

①　じゅういちがつにじゅうさんにち，きょうは，みんなで，しゅぜんじへもみじをみ**に**いきました。

④　ろくじごろ，よしださんがくるまでむかえ**に**きました。

にぎやか(1)

㉘　いまは，**にぎやか**だね。

にじゅうさん〔二十三〕(1)

①　じゅういちがつ**にじゅうさん**にち，きょうは，みんなで，しゅぜんじへもみじをみにいきました。

にち〔日〕(1)

①　じゅういちがつにじゅうさん**にち**，きょうは，みんなで，しゅぜんじへもみじをみにいきました。

には(2)

⑪　よしださん，しゅぜんじ**には**，なんじごろつきますか。

⑫　そうですね，むこう**には**，じゅうじはんごろつきますよ。

ね(30)

(1)⑤　きょうは，いいおてんきです**ね**。

⑥　ほんとうに，いいおてんきです**ね**。

⑦　しゅぜんじも，たぶん，いいおてんきでしょう**ね**。

⑧　そうでしょう**ね**。

⑬　うん，そうするとくるまでよじかんぐらいです**ね**。

⑭　しゅぜんじのもみじは，きれいでしょう**ね**。

⑯　ああ，ちょうどよじかんでした**ね**。

⑰　きれいです**ね**。

⑱　うん，すばらしい**ね**。

⑲　きれいなもみじですね。

⑳　ええ，いまがいちばんきれいですね。

㉑　いいいろですね。

㉒　これは，むかしのしゅぜんじのちずですね。

㉔　えーと，ここは，このあたりだね。

㉕　このあたりは，むかしは，いえがすくなかったんですね。

㉖　とてもさびしかったんでしょうね。

㉗　そうね。

㉘　いまは，にぎやかだね。

㉙　みちも，とてもせまかったんですね。

㉚　いまは，ずいぶんひろくなりましたね。

㉛　こうつうも，ふべんだったでしょうね。

㉜　これはめずらしいですね。

㉝　たかいんでしょうね。

㊶　あちらのおみせのほうがやすかったですね。

㊷　そうですね。

㊹　そうだね。

㊺　さっきのみせは，やすくなかったですね。

㊿　きょうは，とてもたのしかったですね。

(55)　たのしかったですね。

(2)⑫　そうですね，むこうには，じゅうじはんごろつきますよ。

ね(1)

㊸　**ね**，やすいでしょう。

の(8)

⑭　しゅぜんじ**の**もみじは，きれいでしょうね。

㉒　これは，むかし**の**しゅぜんじのちずですね。

㉒ これは，むかしのしゅぜんじ**の**ちずですね。

㊴ ほか**の**みせでは，もっとたかいですよ。

㊶ あちら**の**おみせのほうがやすかったですね。

㊶ あちらのおみせ**の**ほうがやすかったですね。

㊺ さっき**の**みせは，やすくなかったですね。

㊶ しゅぜんじ**の**もみじは，とてもきれいでした。

は(17)

① じゅういちがつにじゅうさんにち，きょう**は**，みんなで，しゅぜんじへもみじをみにいきました。

③ そと**は**，まだあかるくありませんでした。

⑤ きょう**は**，いいおてんきですね。

⑨ よしださん，しゅぜんじ**は**，とおいんですか。

⑭ しゅぜんじのもみじ**は**，きれいでしょうね。

㉒ これ**は**，むかしのしゅぜんじのちずですね。

㉔ えーと，ここ**は**，このあたりだね。

㉕ このあたり**は**，むかしは，いえがすくなかったんですね。

㉕ このあたりは，むかし**は**，いえがすくなかったんですね。

㉘ いま**は**，にぎやかだね。

㉚ いま**は**，ずいぶんひろくなりましたね。

㉜ これ**は**，めずらしいですね。

㉞ いいえ，おくさん，これ**は**，やすくていいしなですよ。

㊲ あれ**は**，たかいよ。

㊺ さっきのみせ**は**，やすくなかったですね。

㊹ きょう**は**，とてもたのしかったですね。

㊶ しゅぜんじのもみじ**は**，とてもきれいでした。

はい(1)

㊽ **はい**，かしこまりました。

はやい〔早い〕(1)

② あさ，**はやく**おきました。

はん〔半〕(1)

⑫ そうですね。むこうには，じゅうじ**はん**ごろつきますよ。

ひろい〔広い〕(1)

㉚ いまは，ずいぶん**ひろく**なりましたね。

ふべんな〔不便な〕(1)

㊷ こうつうも，**ふべん**だったでしょうね。

へ(1) じゅういちがつにじゅうさんにち，きょうは，みんなで，しゅぜんじ**へ**もみじをみにいきました。

ほう〔方〕(1)

㊶ あちらのおみせの**ほう**が，やすかったですね。

ほか(1)

㊴ **ほか**のみせでは，もっとたかいですよ。

ぼく〔僕〕(1)

㊱ **ぼく**，あのうまがほしいな。

ほしい(1)

㊱ ぼく，あのうまが**ほしい**な。

ほんとうに〔本当に〕(1)

⑥ **ほんとうに**いいおてんきですね。

ました(5)

(1)① じゅういちがつにじゅうさんにち，きょうは，みんなで，しゅぜんじへもみじをみにいき**ました**。

② あさ，はやくおき**ました**。

④ ろくじごろ，よしださんがくるまでむかえにき**ました**。

⑮　さあ，つき**ました**。

(2)㉚　いまは，ずいぶんひろくなり**ました**ね。

ましょう(1)

㊶　さあ，そろそろかえり**ましょう**。

ます(2)

(1)⑪　よしださん，しゅぜんじには，なんじごろつき**ます**か。

(2)⑫　そうですね。むこうには，じゅうじはんごろつき**ます**よ。

まだ(1)

③　そとは，**まだ**あかるくありませんでした。

まで(1)

㊷　おそく**まで**ありがとうございました。

み，みる〔**見る**〕

①　じゅういちがつにじゅうさんにち，きょうは，みんなで，しゅぜんじへもみじを**み**にいきました。

みせ〔店〕(3)

㊴　ほかの**みせ**では，もっとたかいですよ。

㊶　あちらのお**みせ**のほうがやすかったですね。

㊺　さっきの**みせ**は，やすくなかったですね。

みち〔道〕(1)

㉙　**みち**も，とてもせまかったんですね。

みんな(1)

①　じゅういちがつにじゅうさんにち，きょうは，**みんな**で，しゅぜんじへもみじをみにいきました。

むかえ，**むかえる**〔迎える〕(1)

④　ろくじごろ，よしださんがくるまで**むかえ**にきました。

むかし〔昔〕(2)

㉒　これは，**むかし**のしゅぜんじのちずですね。

㉕　このあたりは，**むかし**は，いえがすくなかったんですね。

むこう(1)

⑫　そうですね，**むこう**には，じゅうじはんごろつきますよ。

めずらしい(1)

㉜　これは，**めずらしい**ですね。

も(4)

⑦　しゅぜんじ**も**，たぶん，いいおてんきでしょうね。

㉙　みち**も**，とてもせまかったんですね。

㉛　こうつう**も**，ふべんだったでしょうね。

㊷　てんき**も**よくて，たのしいいちにちでした。

もっと(1)

㊴　ほかのみせでは，**もっと**たかいですよ。

もみじ(4)

①　じゅういちがつにじゅうさんにち，きょうは，みんなで，しゅぜんじへ**もみじ**をみにいきました。

⑭　しゅぜんじの**もみじ**は，きれいでしょうね。

⑲　きれいな**もみじ**ですね。

㊶　しゅぜんじの**もみじ**は，とてもきれいでした。

やすい〔安い〕(4)

(1)㊸　ね，**やすい**でしょう。

㊺　さっきのみせは，**やすく**なかったですね。

㊶　あちらのおみせのほうが**やすかった**ですね。

(2)㉞　いいえ，おくさん，**やすくて**いいしなですよ。

よ〔四〕(2)

⑬　うん，そうするとくるまで**よ**じかんぐらいですね。

⑯　ああ，ちょうど**よ**じかんでしたね。

よ(6)

⑩　いいえ，そんなにとおくありません**よ**。

⑫　そうですね，むこうには，じゅうじはんごろつきます**よ**。

㉞　いいえ，おくさん，これは，やすくていいしなです**よ**。

㊲　あれは，たかい**よ**。

㊳　いいえ，たかくないです**よ**。

㊴　ほかのみせでは，もっとたかいです**よ**。

よい(1)

㊷　てんきも**よくて**，たのしいいちにちでした。

よしだ〔吉田〕(3)

④　ろくじごろ，**よしだ**さんがくるまでむかえにきました。

⑨　**よしだ**さん，しゅぜんじは，とおいんですか。

⑪　**よしだ**さん，しゅぜんじには，なんじごろつきますか。

ろく〔六〕(1)

④　**ろく**じごろ，よしださんがくるまでむかえにきました。

を(2)

①　じゅういちがつにじゅうさんにち，きょうは，みんなで，しゅぜんじへもみじ**を**みにいきました。

㊼　これ**を**ください。

ん(5)

⑨　よしださん，しゅぜんじは，とおい**ん**ですか。

㉕　このあたりは，むかしは，いえがすくなかった**ん**でしょうね。

㉖　とてもさびしかった**ん**でしょうね。

㉙　みちも，とてもせまかった**ん**ですね。

㉝　たかい**ん**でしょうね。

資料2. シナリオ全文

題　　名　日本語教育映画
「もみじが　とても　きれいでした」
—です，でした，でしょう—
企　　画　国立国語研究所
制　　作　日本シネセル株式会社
フイルム　16㎜EKカラー・スタンダード
巻　　数　全1巻
上映時間　5分
現 像 所　東映化学
録　　音　読売スタジオ
完　　成　昭和53年1月31日

制作スタッフ

制　　作	静永純一
制作担当	佐藤吉彦
脚　　本	前田直明
演　　出	前田直明
演出助手	林　洋一
撮　　影	八柳勇三
撮影助手	松屋研一
照　　明	伴野　功
音　　楽	吉田征雄
録　　音	小川正城（読売スタジオ）
ネガ編集	亀井　正

配　　役	少　年	遠藤義徳
	父	入江正徳
	母	若松和子
	吉　田	小野田英一
	店員A	石井義幸
	店員B	山本　梢

カット	画　　面	セ　リ　フ
1	メイン・タイトル 日本語教育映画	
2	テーマ・タイトル もみじが　とても　きれいでした ――です，でした，でしょう――	
3	日記を書く少年	①じゅういちがつにじゅうさんにち，きょうは，みんなで，しゅぜんじへもみじをみにいきました。
4	同	
5	少年，ベッドから起き上がる	②あさ，はやくおきました。
6	窓から外景	③そとは，まだあかるくありませんでした。
7	時計	④ろくじごろ，
8	車，吉田下りる	よしださんがくるまでむかえにきました。
9	車の走り	吉田「⑤きょうは，いいおてんきですね。」
10	母	母「⑥ほんとうに，いいおてんきですね。 ⑦しゅぜんじも，たぶん，いいおてんきでしょうね。」
11	吉田	吉田「⑧そうでしょうね。」
12	地図を見ている少年	少年「⑨よしださん，しゅぜんじは，とおいんですか。」
13	吉田，車を運転しながら	吉田「いいえ，そんなにとおくありませんよ。」

14	車の走り	
15	少年，地図を見ながら	少年「⑪よしださん，しゅぜんじには，なんじごろつきますか。」
16	車の走り	吉田「そうですね，むこうには，じゅうじはんごろつきますよ。」
17	腕時計	
18	父，腕時計から目を離して	父「⑬うん，そうするとくるまでよじかんぐらいですね。」
19	父と母	母「⑭しゅぜんじのもみじは，きれいでしょうね。」（夫，うなずく）
20	もみじ	
21	車が止まる	吉田「⑮さあ，つきました。」
22	時計	少年「⑯ああ，ちょうどよじかんでしたね。」
23	四人歩く	
24	もみじ	母「⑰きれいですね。」
25	四人，立ち止まって	父「⑱うん，すばらしいね。（父，吉田に）⑲きれいなもみじですね。」 吉田「⑳ええ，いまがいちばんきれいですね。」
26	もみじ	母「㉑いいいろですね。」
27	もみじ林	
28	四人，地図を見てすわっている	
29	同三人	少年「㉒これは，むかしのしゅぜんじのちずですね。」
30	川と小屋	父「㉓うん。 ㉔えーと，ここは，この

31	地図，指	あたりだね。」
32	街の通り	
33	地図	少年「このあたりは，むかしは，いえがすくなかったんですね。 ㉖とてもさびしかったんでしょうね。
34	街の通り	吉田「㉗そうね。 ㉘いまは，にぎやかだね。」
35	地図	少年「㉙みちも，とてもせまかったんですね。」
36	街の通り，バスが来る	吉田「㉚いまは，ずいぶんひろくなりましたね。
37	地図	㉛こうつうも，ふべんだったでしょうね。」
38	一軒の店から出て，もう一軒の店に入る四人	
39	母と店員	母　「㉜これは，めずらしいですね。 ㉝たかいんでしょうね。」
40	人形を取る	店員A「㉞いいえ，おくさん，これは，やすくていいしなですよ。」
41	少年	少年「㉟あっ，うまだ。
42	馬の置物	㊱ぼく，あのうまがほしいな。 父「㊲あれは，たかいよ。」
43	四人と店員	店員A「㊳いいえ，たかくないですよ。 ㊴ほかのみせでは，もっとたかいですよ。 ㊵これ，どうです？」

44	母と吉田	母「㊶あちらのおみせのほうがやすかったですね。」 吉田「㊷そうですね。」
45	店を出て，さっき出てきた店にもどる四人	
46	馬の置物	母「㊸ね，やすいでしょう。」 父「㊹そうだね。 ㊺さっきのみせは，やすくなかったですね。」
47	馬の置物を買う	店員B「㊻いらっしゃいませ。」 母「㊼これをください。」 店員B「㊽はい，かしこまりました。 ㊾おまたせしました。 ㊿ありがとうございました。 （おじぎをする）」
48	四人，店を出て来る	父（腕時計をみる） 「(51)さあ，そろそろかえりましょう。」
49	門の前，車止まる 四人，車を下りる	父「(52)おそくまでありがとうございました。」 母「(53)ありがとうございました。」 (54)（夫に向かって）「きょうは，とてもたのしかったですね。」 吉田「(55)たのしかったですね。 (56)じゃあ，しつれいします。 (57)さようなら。」
50	吉田，車に乗る 車走り出し，三人残る	父・少年「(58)さようなら。」

	少年，手をふる	母「㊾さようなら。」 少年「㊿さようなら。」
51	少年，日記をつけている	(61)しゅぜんじのもみじは，とてもきれいでした。
52	同	(62)てんきもよくて，たのしいいちにちでした。
53	企画・制作タイトル 企画　国立国語研究所 制作　日本シネセル株式会社	

昭和55年3月

国立国語研究所

〒115　東京都北区西が丘3－9－14
電話東京（900）3111(代表)

印刷所　城北高速印刷協業組合
電話（966)8101(代表)